

---

# 砂渦の中、竜の市

ヒガシ東々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

砂渦の中、竜の市

### 【Nコード】

N3528X

### 【作者名】

ヒガシ東々

### 【あらすじ】

かつては、知に優れ、炎を秘め、感応力で人を見破った竜たち。竜たちがそれらの力を失って、人の家畜と成り下がり、十数年が過ぎた。

主人公サイルは、竜の不遇に憤り、愛竜のミーサークと各地を巡っては捕らわれの竜たちを逃がして回っていた。ある時サイルは、砂滴の国の都を訪れ、知能を隠し持った竜と出会う。

竜を憎む国の女王から隠し、守るよう、竜の卵を託される。 >br<

その時そこへ、ある娘さえ現れなければ、サイルは卵とともに逃亡していたのだが――。

## 【序】 竜、その友

頭上には、紺碧に照り輝く春空がある。

翼の下には、風が敷いた、鮮やかで優美な金砂の丘陵がある。

その狭間を、一頭の竜が疾風のごとく飛んでゆく。

沙漠の熱風を裂いて前方へ、猛禽のような曲がったくちばしが突き出し、若緑色のつやめく鱗で覆われた丸い頭と、長い首へ続く。首根から胴は流線型で、人の身の倍の長さがあり、この竜に限っては人が抱えられるほど細かった。腹からは、鳥に似た節の脚が伸び、飛んでいる間はぴったりと身体に沿う。そして、両肩には巨大な翼があつて、一面に生えた鱗が風を打ち、ざうざうと鳴る。翼の先で光るのは、尖った鍵爪だ。

竜の胴には、【砂食い豹】の皮製のベルトが回され、それで背に固定された鞍には乗り手がいた。

不意に、乗り手は口笛を鳴らし、熱を放つ竜の首根を手で軽く叩いた。

行く先に、木々の茂る大きな集落がある。オアシスだ。竜は乗り手の合図に従い、そこへ降りた。

集落の人間たちの他に、旅人らしい集団も休んでいた。竜を連れて、小さな商隊のようだった。彼らは新しくやって来た竜を見上げ、感嘆の声を漏らした。

当の竜は、大人数に囲まれて注目されているためか、落ち着き無く視線をさ迷わせる。乗り手がそのくちばしをなでて落ち着かせた。乗り手の仕草には、鋭く険しい表情からは想像しがたい、優しさが滲んでいた。

旅人の一人が乗り手に近づいた。

「ずいぶん華奢で綺麗な竜じゃないかね。しかも、大人しそうで、言うことをよく聞いているらしい」

ところが乗り手は旅人の言葉に興味も示さず、集落の人間から飲

み水を買って、自分の竜に与えるだけだ。旅人はさらに続けた。

「わしらの竜は、少し年寄りだね。力不足で飛行も遅い。その竜と二頭で荷車を轆かせたら、我々は助かるし、目にも楽しい。どうだね。賃金を出すから、その竜を都まで貸してくれやしないかい。道中の飯も提供しよう」

乗り手は無言のまま、腰に下げていた鋼のこん棒を手にとった。そして旅人を放っておいて、泉の近くで休んでいる、キャラバン隊の年老いた竜に近寄る。老竜の翼と脚には、動きを封じるための枷がついている。簡単な枷だが、老いて力の衰えた竜であれば、拘束力は十分だ。

乗り手はこん棒を振り上げると、拘束具の継ぎ目を打ち付けた。耳をつんざく金属音と火花が散り、ほんの三撃で枷は碎けた。

啞然とする旅人たちを尻目に、乗り手は老竜の首をさする。

「行け」

老竜の熱い鱗を叩く。

竜が言葉を理解したのは昔の話だ。知能も、感能力も、炎も、彼らは失って久しい。

「行け、あんたは自由だ」

それでも、乗り手は繰り返す。やがて老竜は枷のないことに気づくと、ゆつくりとはばたき、主人である旅人たちを置いて、空へ登っていった。

「なんてことしてくれやがる」

旅人たちが気色ばみ、乗り手をかこんだ。乗り手は、顔面目がけて突き出された旅人の拳を、細い片手でこともなげに受け止め、二倍は体重のある相手の胸倉をつかんで、草束でも扱うように後ろへ放り投げた。

次に飛び掛った旅人が、乗り手のターバンを掴む。その時、ターバンが乱れ、黒い付け毛とともに砂地に落ちた。

付け毛の下から現れたのは、彼の竜と揃いの、若緑色の髪だった。乗り手は素早く髪を隠すと、自分の竜の背に乗った。首根と腹を

叩き、口笛で合図すると、竜は砂煙を上げて飛び立った。

「【竜が（じた）舌】だ」

旅人たちの罵りに、乗り手はひそかに身を固くした。何度呼ばれても、決して慣れることのない蔑称だった。

「【檻砕きの竜が舌】だ。ちくしょう」

竜は遠ざかる。だが、騒動の傍らにいた集落の子供が、高い声で母にたずねるのを、乗り手のずば抜けて優れた耳は聞き拾った。

「ねえ。竜が舌って何？」

母はきつと、顔をしかめて、忌まわしい話を語るだろう。

聞くまいと、乗り手はさらに竜に合図を送る。竜は翼の鱗を鳴らしながら遠のいていった。

だから、乗り手は聞かなかった。

母が子供に語るのを。

「竜が舌っていうのはね。竜に呪われた、可哀想な一族なの。彼らの人生で重要なのは竜だけ。いつか、彼らが私たちを、私たちが彼らを……することができれば。いいえ、そんな未来はないかしら。彼らは滅びるのだから。力を失った哀れな竜族と、一緒にね」

## 【第一話】 てのひらに命

都を囲う巨大な外壁の前に、若緑色の雌竜が降り立った。

竜の背から降りてきた乗り手が、都の門兵たちに、都入りに必要なもろもろの許可証と、自分と竜の身分証名称を見せた。全て偽造だったが、乗り手は難なく入門の許可を得た。

竜の名はミーサーク。乗り手は、サイルといった。

都入り許可証明札を二枚受け取ったサイルは、片方をミーサークの尾につけ、再び彼女と共に、山吹色に染まりつつある空に上る。

都の外壁を軽々と越えて、都の中心部へ向かう。都では身体の大さが理由で、一箇所を除き、竜に往来を歩かせることが禁じられている。「商品」である場合も同じだ。ただしその場合は多くが「野性」の竜であるため、檻に入れて空運される。【竜商い会】の所有する訓練を受けた運搬用の竜が、複数頭で「商品」を檻ごと吊り上げ、目的地へと運ぶのだ。

今も前方の目的地に、檻が下ろされていた。

後に続くサイルの眼下が、忽然と開ける。

十余年前、女王の命令で民家と路地を取り壊して作られた、巨大な円形の広場だ。向こう端に立つ竜騎兵など、ゴマ粒ほどにしか見えない。

その広場には大勢の人間が行きかっている。そして、あちらにもこちらにもできている、人だかりの真ん中には、巨体を丸めた竜の姿があつた。あるいは鎖でがんじがらめにされ、あるいは狭い檻に入れられて。

「誉れ、女王が翼ども。此処こそ竜るつぼ、ドラゴン・バザール」女王が、一流の職人に作らせた門柱に、誇らしげにそう刻まれている。ここ【ドラゴンバザール】、つまり【竜市】は、労働手や愛玩動物として、人間が竜を人間に売る市場なのだ。

この国では女王が竜の売買を奨励している。竜の質と品揃えを認

められた商人には、恩賞まで出る。売買はますます盛んになり、最近では、大陸の竜はほとんどこの国に集まっているとまで言われる。十余年前まではこうではなかった。

竜は人間と同等の知能と、感応力と、腹には火炎を持っていた。生命力に溢れ、どれほどの傷も一時的に動きを鈍らせるだけ。心臓に達する傷でさえも、多くは時間さえたてば癒えた。かつては他の生命の届かぬ、強大な種族として空にあつたのだ。

しかし、ある時唐突に、竜たちはその力を失った。恐ろしい力をふるったという竜たちの王も姿を消し、竜たちは力が強いだけの獣となり、知と数で上回る人間たちに、次々捕らわれていった。

ドラゴンバザールの一画で叩かれた銅鐘が、サイルの思考を途切れさせる。

誰かが新たに竜の主人となつたのだ。鐘の音は、商談成立の合図だった。竜を買うには、買い取りたい竜の見せ台に集まり、高く手を上げて、定められた手合図で商人に希望額を伝える競りに参加しなくてはならない。参加者の中で、最も高い値をつけた者が竜の所有者となる。

サイルとミーサークはそのドラゴンバザールの隅に下り、待ち受けていた竜商い会の人間に証明書を見せる。もし、サイルの真の目的を知れば、彼らは目をむき竜騎兵のもとへ走っていく。しかし完璧な偽造書類がサイルに自由を与える。

証明書を預かって、竜商い会の太った青年がこちらをじつと見上げる。怪しんでいるにしては、その表情は明るく嬉しげだ。やたら鼻をひくつかせている。犬のように尖ったその特徴的な鼻先は、黄色の毛並みの亜人、【ひだまり狼】一族だ。

「ねえ。君。サイルくん？ 僕のこと覚えてるかい？」

青年はそんなことを聞いてくる。

サイルにはまるで覚えが無い。彼を無視して、ミーサークをドラゴンバザールに待たせたまま、誘いの市に戻っていった。

誘いの市は、都に古くからある大通り兼商店街だ。さすがの賑わ

いだった。大小の都人たちと、奴隷制度から解放たれ都民となつたばかりの半獣の亜人たちが、沸いた湯のようにせめぎ合う。通りの両端には、布張りの簡易テントの露店が並び、見せ棚どころか道にはみ出してあらゆるものが売られていた。果物、香辛料、衣装、装飾品、金物。所々で、飯屋の鍋の湯気が輝いている。水売りの金の音から、路上公演を始める楽団一座が騒がしい中で、商人たちは青筋を浮かべて、呼び込みや金勘定に声を張り上げる。

サイルは途中の露店に寄った。目的は、大王椿を数珠につないで、真つ赤な飴で覆った菓子だ。竜という生き物は不思議な好みをしていて、赤色のものなら、何でも食べた。ミーサークは中でもこの菓子が好物だ。彼女の喜ぶ様を思い、自然と、微かな笑みが浮かんだ。しかし、この日はサイルの目の前で、菓子が売切れてしまった。

諦めて立ち去ろうとしたところに、後ろから肩を叩かれた振り返ると、背後についてきていた例の【ひだまり狼】の青年がにっこりと笑ってみせる。

「そのお菓子、食べたいのかい？ もらってあげようか」

言うなり青年は、サイルの前で、菓子を二本買った女を引きとめ、愛想よく喋って一本をもらってしまった。

普段なら断っているところだが、長旅で疲れたミーサークを思うと、少し礼を言うくらい我慢できそうだった。だが、礼では終わらなかったのだ。

若者は、ナキと名乗り、菓子を受け取って去るサイルにしつこくついてくる。

「覚えなかな、僕のこと。一年前、まだ奴隷だった僕が、主人に痛めつけられてるところを、君が主人をぶん殴って助けてくれたんだよ」

「人違いだ」

「いいや。忘れるもんか。僕は臭いで覚えているのさ。僕ら一族の鼻は、竜並みに利くんだから。あの時はありがとう」

「知らないな。ついてくるなよ」

それでも、ナキは後ろに従って一方的に喋る。

「ねえ。君は何をしてる人なの？ 旅人？ 都へは何をしに来たの？ ねえ。いっしょに夕食を食べないかい」

サイルはナキを無視したまま、ミーサークと再会し、ドラゴンバザールに隣接する巨大な建物へ向かう。

竜を所有する者のための宿で、【竜棚】と呼ばれている。一階は、格子のついた六角形の部屋が並び積み重なっただけの、骨組みのよくな吹きさらしだ。その上には、きちんとタイル装飾されたバルコニー付の壁があり、ドーム屋根が乗っている。上は人間用の宿、下の格子部屋は、竜のためのものだ。

門をくぐってすぐの中庭に入り、コの字型に作られた回廊に囲まれた途端、サイルは眩しさに立ちすくんだ。竜の部屋の格子が西日を受け光っている。格子は、向こうの景色が透けるほど澄んだ色をしていた。

驚くサイルを見上げて、ナキが得意げにまくし立てる。

「新しい格子部屋さ。秘密の素材で作られてるんだ。一年前、【檻砕きの竜が舌】が、竜たちを解放しちゃったもんだから、対策をとったのさ。透明だから、脆そうに見えるでしょ？ でも、竜の力にもびくともしないんだよ」

ナキが言うには、その素材は、女王陛下に許された者だけが竜の装具に使うのだという。正体や加工方法は、宮殿に仕える職人以外、誰も知らないらしい。

サイルは密かに、用心深く格子を眺めた。

これは、思わぬ障害となるのだろうか。

思案しながらも、不自然に思われぬよう、空いている格子部屋にミーサークを入らせた。ぶ厚い暗幕を引き音も風も絶つ。長い間、ミーサークは身じろぎばかりしていたが、食事と菓子をとってしばらくすると、疲労に負けて眠りについた。

サイルとナキが部屋を出た時、廊下に大きな笑い声が響いた。

少し離れた檻の前で竜商人らしい男が、客と上機嫌で話し込んで

いた。

「明日の整理の目玉はこちら、この雄竜ですよ。筋骨隆々として角なんか大きくて三本もございます。きつと、ご友人の間でご自慢になれますよ、お嬢様」

金持ちが竜を物色に来ているのだ。

竜棚は、竜所有者のための宿ではあるが、宿泊者の多くは竜商人で、競りを控えた商品、または終えた売れ残りの商品を連れている。下見や掘り出し物探しの客のために、竜棚の一階は開放されている。苦々しい思いで商人たちを睨むサイルの横っ腹を、まだ待っていたナキが、つついた。

「あの商人のお客は、大臣のカヌーン様だよ」

言われて、サイルはぶしつけに大臣とやらを眺めた。

目じりを下げて、まどろんでいるかのような穏やかな表情で、商人の話に頷いている。女王の右腕といわれ、政治に無関心な女王の代わりに、彼が法を整え、治安維持のため厳しいほど監視と罰則を布いた。また他方では弱い者へ施し、全うな労働と、生活の保障を与えた。都の治安は彼のおかげで保たれている。人間にとっての治安は。

サイルは舌打ちをした。カヌーンは、竜に狂う女王を野放しにし、結果的に竜商業を繁栄させた男だ。

「それに、隣の女の子は、お嬢様のリカー様さ。よく竜棚を見に来るんだ。とにかく頭を下げて」

カヌーンは、しきりに連れている娘を振り返り、うかがう。

娘はほっそりとして、周りの男たちと同じくらいの長身だが、顔が幼いから、年は恐らく十の半ばだ。長い黒髪は簡単に二つのおさげにして肩に垂らしてある。のんびりした下がり眉の下で、まばたきするたびに、小麦色の頬と長い睫が楽しげにはねる。美しい娘だった。

娘は、大型の竜の檻を過ぎて、痩せた雌竜の入った檻の前で止まる。

その竜は、檻に寝そべってじっとしている。【昏針】を刺され、  
氣力を失っているのだ。昏針とは、砂漠の向こうの北の寒地に降る、  
触れた者を凍えさせると言われる冷雨から作った毒針だ。

娘はしばらく弱った竜の氣を引こうとしていたが、諦めて目を逸  
らし、その拍子にサイルたちに気づいた。

顔見知りなのだろう、娘は小さくナキに手をふる。その隣のサイ  
ルにも、挨拶代わりに微笑む。良家の娘が男に笑みなど向けて、ふ  
しだらと叱られるのではないだろうか。娘がこちらへ近寄ってこよ  
うとしたのを、さすがに大臣の護衛らしい女私兵が止める。目つき  
の悪いサイルを警戒したのか、そのまま何やら強引にカヌーンと娘  
を連れ、中庭から竜棚を出て行った。悪くない勘だ。

静かになった回廊に、不意に、重たげな竜の鱗の音が響く。そし  
てどこかで竜が小さく、呼び声を上げる。ミーサークの声ではなか  
った。

ある格子部屋の中で、ぐっと首を上げる竜がある。

カヌーン大臣の娘が眺めていた、ついさっきまで眠っていた雌の  
竜が、首を起こして毒で閉じそうな目でサイルを見つめていた。

その細めた瞳が虹色に光る。

目が合った途端に、サイルの視界を塗りつぶすようにして、鮮や  
かな記憶が蘇った。あの瞳の輝きを、かつては小さなミーサークも、  
ミーサークの両親も持っていた。

サイルは胸騒ぎを感じ、虹色の瞳の竜に駆け寄った。だが、サイ  
ルに続いてナキがそば来ようとする、竜は目を閉じ、首を背けて  
しまった。

「サイル。お腹減ったよ。たらふく亭っていうおいしいお店がもう  
すぐ混み始めるから、もう行こうよ」

それでもサイルが動かないと、ナキはサイルの是非も聞かず、席  
を予約してくると言ってその場を離れた。

ナキを見送ったサイルの横頬に、熱い風が吹いた。

竜の口が音も無く開いていた。

「我らの友よ」

一緒に吐き出されたのは、知能を持つ人と亜人族と、そして知能を持っていたかつての竜だけが自在に操れる語りだった。

「【竜が舌】のサイルよ。感じるよ、君と、君の竜の間の親愛を。同胞の友は私の友。君は竜の友。ああ最後に、君に出会えるとは、これまでの苦難も報われるというもの。どうか、私に残る希望を、託されてはくれないだろうか」

サイルは震えた。喜びと希望がこみ上げ、肺がしぼんだみたいに息苦しい。

この竜は、知能を、感応力を、どうしても失わなかったのだ。  
「任せろ」

サイルは叫んでいた。

「必ず、俺があんたを逃がしてやる。必ず」

サイルの自信と、サイルの脳裏を駆け巡った過去の功績を、感応力で読み取っているだろうに、竜は静かに首を振る。

格子を握るサイルの拳に息を吐きかけ、

「さあ。手を出して」

と言った。サイルは格子の隙間から右手を差し入れた。

竜の首がぐつとしなり、喉の奥から口に向かって鱗が波打った。腫れた喉から何かが、触れて飛び上がるほどの熱をもった何かが、サイルの手のひらに落ちた。火を吐かれたかと思うほどの衝撃で、危うくそれを取り落とすところだった。

「私の子だ」

手の中には、若緑色に輝く球体がある。私の卵だ。竜は言う。それは子竜の命の重みなのか、見た目よりもずつと重い。

「私の願いはその子の幸福だけ。どうか導いてやっておくれ。友よ」  
竜は細い息を吐いて、崩れるように首を横たえ、それきり動けなくなった。何度呼びかけても、手を伸ばして揺すっても応えなかった。竜の熱風のような呼吸もない。

まさか。サイルは冷たい予感に震えた。

寿命以外で、竜が命を失うとは滅多にないといわれる。それでも人間に使役されてこの十余年、過酷な使役か、捕獲の時の残酷な罠のせいか、竜が倒れることもあった。

そして今にも、サイルの目の前で、鱗が艶を失うほど、身体が冷えるほど深く眠った竜が。見る間に輪郭を失い、砂の山と化した。

## 【第二話】 漆黒の娘は幼い竜を抱いて

竜の残した砂山を撫ぜた手で、サイルは若緑色の卵を包み込んだ。卵の表面はさらりと布ずれに似た音をたて、回廊に密やかに響いた。竜が知恵を失ってから十余年の間、どんなに賢者や商人が試みても、竜が卵を産んだことは無い。竜はじき絶えるものと考えられていた。では、この卵は竜の唯一の未来だ。サイルは竜の未来を託されたのだ。

サイルはもう一度だけ、格子の間から竜の亡骸に触れて、立ち上がった。上着の下に卵を隠し、ミーサークの部屋に戻った。

サイルは眠っていたミーサークを起こし、卵を見せた。ミーサークは咄嗟に見慣れないものを怖れ後ずさり、目をしばたかせている。「お前の仲間が、俺たちに頼んだものだぞ」

語りかけても、彼女は言葉が理解できない。ミーサークは知恵を無くした。十余年前のあの日、旅立つ直前にミーサークは教えてくれた。竜の王ケトムがこの国に飛来し、全ての竜を呼び寄せたのだと。

彼女は言った。

「母さんが言ってたわ。ケトム王の鱗にね、太陽や月の光が映ると世にも綺麗なんだって。怖い竜だっていうから、きつと鱗はくれないわ。だから怖いけど、怖くて仕方ないけど、こっそり鱗をはぐってこようと思うの。人間は綺麗なものが好きでしょ。人間にとって、はきつと価値があるから、サイルは、鱗と引換えに、自分で自分を買えるんじゃないかしら」

それが最後の会話だった。

戻ってきた時彼女は親竜とはぐれ、何もかもを恐れて、隠れ場で縮こまった。そしてじきに動くこともできないほど弱った。竜の生命力が並外れて強いことは知ってはいたが、サイルはミーサークを

失ってしまうのだと思って、抱きついて泣いた。ミーサークはその時初めてサイルが目に入ったのか、落ち着きを取り戻して首を寄せ、やがて体力も戻った。

その時のように、もしさつき、あの親竜を抱きしめていたら、命を助けることができたのだろうか。いや。まさか、そんなはずはあ  
るまい。

サイルは置いたばかりの旅支度を持ち上げ、部屋の隅に繋げてあったミーサークの首輪を外す。

だが、部屋から出ようとした時、サイルは軽やかな足音が回廊を近づいてくることに気づいた。

荷物を置き、卵をその影に隠したと同時に、暗幕が揺れて隙間から、光と共に細い指が入る。誰かが部屋の中を覗き込んだ。

サイルが憤然として部屋から出て行くと、覗いていた者は、驚いて後ずさった。

カヌーンの連れの娘、リカーだった。

沈みぎわに一層強くなった西日の中、緩やかにうねる娘の黒髪の上を、光が走っては黄金色に染める。鱗に陽を映す竜の首のようだと、サイルは思った。

娘は、サイルの怒りを察し頭を下げた。

「ごめんなさい。勝手にのぞいたりして。竜商い会の人たちが、とても綺麗な竜が竜棚に泊まっていると言っていたものだから。一目見たかったのです」

遅い時間だからと、父であるカヌーンに反対されたので、人ごみに紛れ、こっそり一人で戻ってきたのだという。

「この竜は、売り物じゃない」

サイルは険しい顔を作り、渾身の舌打ちをした。

「俺もミーサークも、竜を売り買いする人間が大嫌いだ。失せな。さもないと、後悔するぞ」

リカーは真つ黒い目を見開いた。怒るか、気圧されるかして立ち去ってくれればいい。もう一押ししようと口を開きかけた時、リカ

ーは身震いし、まなじりを吊り上げて半歩進み出た。

予想外の反応に、サイルは思わず半歩退いた。リカーはさらに近寄って、熱っぽい瞳でサイルを見詰めた。

「あなたは、随分悪ぶっているようですが、それはあなたの罪ではありません。あなたの心にひびをいれ、傷に根ざした、悪意がそうさせるのです。かわいそうな人。傷つけられながら、その権化となっているのですね」

サイルが呆気にとられて、沈黙した時だった。

硝子が割れるのに似た甲高い音が、ミーサークの部屋から聞こえ、暗幕のごしに二人の頬を照らすほどの明るい光が灯った。竜の悲鳴とともに格子部屋が揺れる。内側からミーサークがぶつかつたのだ。サイルは暗幕をめくつた。

ミーサークの背後で、竜の卵の、上半分が碎けて既に形が無い。

その残骸から渦風のように炎が上がっていた。炎は部屋の格子に巻きつき、花卉のように開いて、天上を舐める。

サイルは慌てて、ナキから渡されていた鍵で、格子部屋の竜用の扉を開けた。ミーサークが飛び出してきて、中庭で騒いでいる。屋根付きの人口泉にのぼり、ぐるぐる回る。素早くその全身を確認したが、怪我は無さそうだった。

ミーサークが破った暗幕の隙間から、炎の端を見たりリカーが悲鳴をあげた。サイルには言い訳を考える余裕も無かった。

卵は、無事なのだろうか。

サイルが上着で叩こうと走りよった瞬間に、火は身をよじって宙に消えた。サイルは恐る恐る、卵の中を覗き込んで、声を失った。

卵の底で、淡い桃色の鱗に覆われた、小さな竜がむずがっている。火傷らしい傷は見えなかった。未だ首は短く、頭ばかり大きく、爪の無い翼と足で何かを掴もうとする。

サイルが呆けているうちに、横から細い手がさつと伸びて竜に触れた。サイルがしまったと思った時には、もう遅かった。

「鱗が柔らかいわ」

竜の目があった途端、その手を握ったままりカーは、虹色の瞳の上に身を乗り出した。

「七色が踊っている。昔竜は七色の目を持って、心を見破ったと言うけれど、あなたもそうなのかしら。きつと人の瞳より鮮明に世界が映るのね。さっきの火はあなたの産声で、あなたは、他の竜たちが無くしたものを、持っているのだわ。じゃあ、言葉も？ 呼んでみて。私はリカーよ」

竜は言葉ではなく鳴き声をあげて、リカーの手を、小さな両手と尾で探るように触っている。雛鳥のように最初に見た者を母と思い込んだのか、リカーが抱き上げると、鼻を摺り寄せた。

サイルは腰帯から短剣を引き抜くなり、その反った刃をリカーの顎にあてた。

「それは、あんたのもんじゃない」  
腹は決めていた。

この娘をさらい、砂漠に置き去りにするのだ。

救助された時、娘は洗いざらい事情を吐くだろう。あとになって、オアシスでやりあったキャラバン隊からの証言もあり、このサイルが悪名高き【檻砕きの竜が舌】であったことが世間に知れる。竜の赤子を女王から盗んだ罪とともに、サイルは追われることになる。それがなんだ。赤子を救うためなら、苦にはならない。

「その竜をよこしな」

小さな竜が、唸ってサイルの剣に噛みついた。まるでサイルの敵意を感じ取ったかのようなうた。

もしや、母竜が感応力を持っていたように、小さな竜もその能力を持っているとしたら。サイルの額を興奮の汗が伝った。

「私を連れて行ってください」

突然、リカーは決然と言った。その間にも、竜の牙の生えていない口に手をさし入れ、自分の顔より、竜を刃から遠ざけた。

「あなたは竜を売り買いする人間が、嫌いなのですね？ 信じていいのですね？ あなたが、この竜を、利益のために抱くのではない

と。この竜を、商品や家畜にさせまいと思うのでしょうか。悪意の権化などと言ってごめんなさい。あなたは、竜との愛に生きているのだわ。どうぞ、私をあなたの助けにしてください。私は、竜の試し乗りのために父が用意した、飛行許可も出立許可もあります。この竜を、早くどこかに隠さなければ」

サイルはリカーの常識と、さらには正気を疑った。ただの考えなしが、リカーは進み出て、サイルの腕を引こうとまでした。

サイルは無言で彼女を睨み、リカーから小さな竜をひったくつたとすると幼竜は、サイルに向かって咆えまくり腕に噛み付いた。牙の無い赤子だったために、痛くも痒くもないが、炎が喉の奥にちらついているのでサイルは慌てた。

間一髪、リカーが慌てて竜を取り戻した。

「私があやします」

幼竜は、敵意を込めてサイルを睨んでいる。

仕方なくリカーに竜を抱かせたまま、サイルは暗幕を引き空けた。暗幕の外はすでに夜気がまじりひんやりとしていて、中庭から仰ぐ空も宵の色だった。それでも、そこに光の球が忙しく動いて回って、ほの明るい。光の正体は、【瞬き魚】だ。湿気の多い苔の森を泳ぐ、瞼を持った魚で、餌の虫をおびき寄せるために瞳が発光している。都の一部の人間たちは、それに紐をつけて宙を引き回し、観賞も兼ねて灯りに使う。竜商い会の関係者も、それを好んだ。

灯りは、噴水の上で落ち着き無く地団太をふんでいるミーサークを、遠巻きにしている。

不意に、ミーサークが前のめりに倒れこんだ。サイルが駆け寄ると、独特の臭いがして、彼女の後ろ足に、派手な羽飾りのついた針が二本刺さっていた。昏針だ。

小型の弓矢に似た昏針の射出機を持って、ナキが近寄ってきた。「ごめんよ、サイル。わ。なんて怖い顔だろうね。ねえ、眉毛を剃るのはよした方がいいよ。そんなことより、聞いてよ。そりゃ君の大事な竜だけど、今日始まったばかりの僕と君との付き合いも大事

だけど、僕だって迷ったんだけど、でも、ミーサークが君も鎖も無しで、よりによって竜棚の中庭で、すぐ取り乱してたんだもの。僕はここの管理者の一人でもあるんだ。お客様の安全を、第一に考えなくちゃならなかったんだよ。こうするしかなかったんだよ。後で、なんだっておごるからさ、許してよ。ミーサークを檻に戻したらずぐ、解毒剤を持ってきて、ミーサークにもご馳走を食べさせてあげる」

格子部屋からリカーが出てくる。その袖の中には、光る竜の瞳が隠されている。周囲の緊張と臆病なミーサークの混乱を感じ、幼竜はむずがり、袖から一巻きの炎を吐いた。

リカーの袖には大穴が空き、幼竜があっさりと地面に転がり落ちた。

現れた小さな竜を見て、竜商い会の者たちは、不思議そうな顔をしている。

まさか、十余年一度も見つからなかった竜の赤子がこれとは思わないのだ。だが、沈黙を破ってナキが歓声を上げた。それを気に、竜商い会の者たちは好き勝手喋りながら、竜の周りに集まろうとした。

サイルは素早く竜を拾い上げると、リカーに抱かせ、リカーの首筋には短剣を当てた。

「昏針の解毒薬を持って来い」

周りは皆硬直した。ナキだけがサイルににじり寄ろうとする。傷ついたような場違いな表情をしている。

その直後、周囲の視線が一瞬自分からそれたのを、サイルは感じた。

力強い何者かの足音が背後に迫る。

サイルが、リカーを自分の影に押し込み、振り向ききらないうちに、背後から鋭い槍の矛先が繰り出され、まっすぐにサイルの喉に伸びた。サイルは背後に身体を反らして逃れ、腰から引き抜いたこん棒で、柄を打ち払う。槍は衝撃に飛び、遠く離れた石床に上で、

からりと音を立てた。

サイルの強力に弾かれたことで、槍の主であるカヌーンの女私兵は、両手に響いた打撃に表情を歪め、槍も拾えず立ち尽くしている。その時、サイルの太ももに激痛が走った。竜の鱗を貫き巨体を痺れさせる昏針が、足を貫いたのだ。

ごめんよ、とナキがまた謝るのが聞こえた。

ナキの射出機がこちらを向いていた。

サイルはミーサークの背からすべり落ち、石畳に転がった。

### 【第三話】 狂気の女王

どれほど時間が経っただろうか。サイルは目を覚ました。

投げ出した裸足の足に、砂のざらつきを感じた。両手には、竜棚で使われるあの透明な素材の枷がついている。加えて念入りなことに、竜棚と同じ透明な鎖で身体を縛られ、サイルは石の壁に固定されていた。

ここは真四角の狭い石部屋、おそらく牢だ。

気づけば、昏針で気を失った時に外れたのか、頭に黒髪の付け毛がない。その下に隠れていた、短く刈り込んだ若緑色の髪を見て、サイルの正体に気づかない者はいない。これでサイルの一族は、また一段と株を下げたのだ。なにせ十余年ぶりに誕生した竜の赤子を、持ち逃げしようとしたのだから。おまけに、女王の右腕の娘をかどわかそうとした罪もある。サイルは罰せられ、ミーサークも、罪人の竜だからと冷遇を受ける。幼竜は女王の玩具となり、知能と感応力あれば、それこそが竜をいつそう苦しめることになるだろう。

サイルは、枷に捕らわれた腕に力を込めた。枷はびくともしない。しかしこのまま毒が抜ければ、枷と鎖を壁に固定している金の釘の方を破壊することができるはずだ。怪力と優れた五感を持つ、呪わしい【竜が舌】であればこそ。

「その枷は、竜でも外せんよ」

不意に足元から低い囁きが聞こえた。石の床ごしに、気配を感じる。

「誰だ。牢守りか」

「いんや。わしは、ただの隠居ジジじゃ」

声からして随分な年寄りだ。ここが何階かは分からないが、真下の牢部屋の住人なのだろう。

「お前さんが、噂の、【檻砕き】か」

サイルはおざなりに肯定した。世間では、サイルの仕業はそう呼ばれ、今なお竜に尽くす血迷った賊として知られている。この度都に來たのも、その仕業を為すためだった。それがサイルの人生の意味だった。

牢の隅にある格子戸に、影が近づいた。

影は扉から入り、サイルの顎を蹴り上げた。女が立っていた。竜棚の中庭で斬りあった女私兵だ。女は、視線で射殺そうというかのような、怨念のこもった目でサイルを見下ろした。サイルは半ば答えを期待しないで問うた。

「竜たちはどうなった」

「お前が先に案ずるべきは、リカーお嬢様だよ。あの方にもし、怪我の一つでもあれば、貴様はその場で切り捨てられたんだ。【竜が舌】めが」

その罵りに、自らの身が緊張するのを、サイルは隠せなかった。

「お前と竜とは、一生会えないよ。お前も竜も、もうじき生涯を終えるんだからね。あの赤子の竜は、女王陛下が愛玩なさる」

女は踵を返して部屋を出て行った。

牢守りたちと忙しく何かを言い交わしている。彼女らの会話に耳を澄まそうとするのに、真下で、あの老人が言う。

「案ずるな。お前さんと竜たちは、また会えるよ。牢の石才は皆、へそ曲がりじゃから、今は助けられんが、もう少し辛抱するのじやよ。女王の催しは、もう噂になっておる。残虐を好むばかりに、女王はお前さんを逃すじやろう。さあ、後でまた、会おう」

老人がごそごと物音を立てながら、遠ざかっていった。下の階も、それほど広い牢ではないはずだ。だが老人は遠ざかり、ついに気配は感じ取れぬほど離れて消えてしまった。腹が冷えた。サイルは、幻と話をしていたのだ。

現実のこの部屋では、女と入れ替わりに牢守りたちが現れた。昏針で狙い撃ちされて、サイルは抵抗できなくなった。

廊下を引きずられ、竜用の檻に入れられて、心躍る春の匂いの中

都を引き回され、最後はドラゴンバザールの広場に放り出された。

サイルはふらつく頭を上げ、辺りをうかがった。

ただっ広いドラゴンバザールの真ん中に一人にいる。距離を置いて、女王直属の竜騎兵がサイルを囲む。騎兵の円陣の外側には人だかりがあつた。

ドラゴンバザールに鐘の音が響いて、人ごみが静まり返る。広場はかつてない沈黙に包まれた。そこによく通る男の声が響く。

「罪はこれより裁かれる。この【竜が舌】の罪は、【檻砕き】と称し、女王陛下の竜を奪い……」

ろろろと、男はサイルの罪状を読み上げる。

時に緋色に、時に群青色に鱗を染めたミーサークに乗り、風のように各地へ飛び、人間の家畜として使われている竜たちを枷から解き放ってきた、サイルの罪を。

サイルは両足をふんばって立ち上がった。

ここで終わってしまうわけにはいかない。ミーサークと、捕らわれの竜たちと、生まれたばかりの赤子を空に返さねばならない

演説の合間に、微かなミーサークの声が聞こえる。

サイルの次にいたぶるべく、竜棚に捕らわれているらしい。サイルがかすれた口笛を吹くと声が返る。弱々しいのは、恐らくサイル同様、昏針で力を奪われているのだろう。

そんなサイルとミーサークの会話を掻き消すようにして、人ばかりから不安げなざわめきが起こった。竜騎兵の円陣の一角が乱れ、そこから内側に一頭の竜が入ってくるところだった。

くちばしは大きく、鋭く尖っている。角や牙には、日の光に照る輝石がめり込んでいる。女王の紋章の入った服を着せられているが、その目は着飾った自分ではなく、ただ宙を見詰めていた。この竜だけではなく、竜騎兵の竜たちは、いつも皆このように意思を失っている。女王はいかなる方法でか、竜たちの心まで奪い、完全に自分たちの乗り物となるよう調教するのだ。

「女王陛下がお裁きになる。審判の刃として、陛下の竜が竜が舌を

裂くだろう……」

遠い竜棚のバルコニーに、日よけの派手な色が見える。あそこに女王がいるのだ。毒が抜けて抵抗するサイを竜になぶり殺しにさせて、見物しようと。

「おそろしい狂気の女王」

群集のどこからかそんな罵声が上がったが、兵士たちが目を光らせると、声の主は気配を殺した。

再度鐘が鳴り、沈黙が命じられた。

静寂の中、サイルと、そして女王の竜には、ある音が聞こえた。竜棚のバルコニーから、銀器を爪先で弾くような澄んだ打音が五回。騎兵たちが竜に送る謎めいた合図だ。

すると、ぼんやりと立っていた竜が首をめぐらし、サイルを捉えた。そして猛然と近づいてくる。サイルの上半身にかけられた赤の塗料は、竜の視界でこの上なく目立つのだろう。餌だとも思っているのか。顔をこすつても、塗料はねばついて落ちなかった。

サイルは、透明な枷で手を封じられており、その枷はやはり透明な鎖と楔で、石畳に縫い付けられている。

透明な鎖を手繰り、懇親の力で引いた。頑丈な鎖はサイルの怪力に張り詰め、固定していた十数本の楔を飛び散らせて役目をほぼ失った。そこへ、楔が顔に降りかかるのを物ともせず、竜がサイルへ殺到した。

古石のような風合いをした竜のくちばしが、サイルの身体を裂こうと振り下ろされる。サイルは毒の染みた身体に鞭打ち、跳び逃れた。だが、その場に残っていた鎖が、竜のくちばしに拾われた。

竜は赤い塗料で斑に染まった鎖を嚥下し始めた。サイルの怪力でも、竜が相手では綱引きにもならず、なすすべも無く引きずられる。サイルを救ったのは、竜のよろめきだった。不意に、竜の片足の下の石畳が陥没し、竜は平衡を崩したのだ。続いて、不自然にももう片足の石畳も落ち、竜が倒れる。

降って沸いた好機の一瞬に、サイルは真正面から走った。竜の舌

を押し込んで、熱い口の中へ腕を入れた瞬間、衝撃とともに巨大な上くちばしが落ちた。

牙にも耐える透明の手枷がなければ、サイルの腕は手首から無くなっていった。サイルは手枷で竜の牙を遮ったまま、断りと共に口内の隙間に蹴りを入れた。柔らかい舌を上顎に蹴り付けると、舌は痺れて動かなくなった。

サイルは鎖を喉から引き抜いて、竜とやっと距離を置いた。竜はまだ、足元に開いた穴から抜け出せずにいる。

なんにせよ助かった。サイルが走ろうとした時、竜棚から空へ、若緑色の影がのびた。聞き知ったはばたきの音と、高い呼び声とともに、ミーサークがサイルの元へ飛んで来る。

サイルは口笛で応えた。

なぜ囚われていたはずのミーサークがここにいるのか。答えは、彼女の背にしがみついていたリカーの姿を見て、察することが出来た。

「ミーサークを逃がしてくれたのか」

「解毒薬をあげました。さあ。急いで逃げてください」

言われずとも、サイルはミーサークの背に乗ろうとした。だが入れ替わりに、リカーが降りたではないか。

「来い。あんたは、罪人の竜を逃がしたんだ。咎められるぞ」

サイルは彼女の腕を掴むと、強引にミーサークの背に引きずり上げ、ミーサークを飛び立たせた。

「私は、あなたに逃げてほしいだけなのです。私は、逃げるわけにはいきません。罪を犯したのですから、それを償わなければなりません」

わめくりカーを無視し、サイルは後方を確かめる。すぐに複数の竜騎兵たちが追ってくる。ミーサークの翼は、国中のどの竜よりも速かったが、二人分の重みを背負い、昏針の毒から抜け切らない身体では、騎兵を置き去ることは出来ない。

ミーサークの尾の先が、竜騎兵の鼻先をくすぐっている。

サイルは意を決し、ミーサークの背から飛び、後方の竜に飛び移った。慌てる騎兵に足払いし、命綱で竜の脇腹に彼をぶら下げたまま、手綱を奪った。全腕力を使って手綱を引き、わずかに竜の首を逸らし、肉薄していた隣の竜騎兵に突っ込ませた。サイルと竜騎兵は団子になって、竜棚のドーム屋根に転がり落ちた。

竜騎兵をかわしながらドーム屋根の周囲を旋回するミーサークに、命一杯長い口笛を発した。

「そいつを連れて先に行くんだ。後で、必ず呼ぶから」

何度も口笛を鳴らして、やっとミーサークは上空を離れようとした。これで、ミーサークだけでも、騎兵を振り切って逃れられる――と、安堵するが早い。

下がり眉を、きゅうと上げるなり、リカーが、ミーサークの背から立ち、サイルのいるドーム屋根に向かって跳んだではないか。

サイルは我が目を疑った。あと一瞬判断が遅れていれば、リカーは竜棚の中庭に叩きつけられていただろう。サイルはドーム屋根のタイルに、自分の手枷に繋がっている鎖の楔を突き刺した。丸屋根を走り降り、縁を蹴り、迫り出したバルコニーの上を飛び越えて、不自由な両腕を伸ばし、なんとか一杯に伸ばしたりリカーの手を掴んだ。リカーを胸に抱え込んだ瞬間に、一杯にのびた鎖が、サイルたちを宙吊りにする。

石畳との距離を確かめてから、サイルは鎖を引いて楔をぬき、着地した。サイルは罵りの言葉もつかばずリカーを睨んだ。

中庭に面した頭上のバルコニーに、カヌーンが駆け出てきた。ドラゴンバザールに面した反対側のバルコニーの、貴賓席にいたらしい。ということは、女王も一緒だ。

大臣の後ろから静かに、大臣よりもよほど背が高い、光を纏う美しい女が現れた。

瞳は憂いがちに細められ、眉尻も下向いているが、鼻梁は誇らしげに高く、口には自分の美貌を熟知して保たれる静かな笑みがあった。神々しいほど優雅な動作で、長い衣の裾を運んだ。

「女王陛下」

カヌーンが振り返ってその女、女王へ平伏した。

「どうかお待ちください。これは、何かの間違いでございます。娘が、自分を傷つけようとした罪人の竜を、逃がすはずはありません」

「間違いでは、ありません」

叫んだのはリカーだ。サイルと向かい合った時のような、少し意固地にも見える真っ直ぐさで。だが、その声は彼女の胸の内を現し震えていた。

「このサイルさんは、私利私欲のために、竜をさらおうとしたわけではありません。彼を動かしたのは愛です。あの小さな竜に自由を与えようと、彼は罪を犯してしまったのです。お父様ごめんなさい、私は罰を受けます。でも、何度でも申し上げます。陛下、どうか、竜へのこだわりに押し包まれた、陛下の友愛を見出し、お示しく下さい」

リカーの言葉にも、カヌーンの謝罪にも、女王は表情を少しも変えない。その上唇が持ち上がり、歌うような声音が発せられた。

「カヌーン。お前が、宴に娘を連れてこない理由がよく分かりました。この娘は、お前の恥だったのですね。妻の名を明かさないことも、察しましょう。道徳心が許さないのでしょうから、私がお前の代わりに、この出来の悪い娘を処分しておきます。私が良い妻を選びましょう。次は、良い娘をもうけなさい」

女王は中庭に集まってきた近衛兵士たちに、片手で命令を下す。

それを、カヌーンが慌てて制止した。

「罰は、私が受けましょう。どうか、娘は。娘だけは」

女王は大臣の言葉を見殺し、躊躇する傍らの近衛兵の手から、弓機を取った。

カヌーンが止める間もなく、しなやかな動作で、それでありながら驚くべき力で弓を引き放った。狙われたリカーにとっては幸い、矢は外れて下にいた兵士の足を貫いた。女王はゆったりと自分の失敗を笑って、新たな矢を番えた。

その前にカヌーンが立ちふさがった。

「陛下は、再び、過ちを犯そうとなさっております」

上ずった声だったがはっきりと彼は叫んだ。

「陛下。あつてはならないことなのです。ご自身のお子を、手にかけるなど」

はたと、女王の手が止まった。

その場の誰もがカヌーンの言葉の意味を理解するのに、時間を要した。

サイルは、やや遅れてリカーに視線をやった。リカーは目を丸くして、バルコニーの父と女王を見上げていた。

沈黙の中で、カヌーンははっきりと宣言した。

「リカーは、あなた様のお子です、ヤトレフ女王陛下。十余年前、あなた様が私に、砂に埋めるよう命じたあの赤子なのです。どうか語慈悲を。私に、姫様に」

この国の唯一絶対の王族だったはずの女王と、リカーの視線は、正面からぶつかった。リカーは呆然と女王を見上げている。驚きと興奮がない交ぜになって彼女の顔を染め、見えていて気の毒なほど動揺していた。父を問い詰めることもできず、赤い顔で食い入るように女王を見ている。

やがてリカーの頬には、女王への新たな感情が現れ始めた。全身が目に見えるほど力に満ち、情と敬意を込めて女王へ視線を送る。

一方女王は、微笑で繕おうとしているのは伺えるのだが、美貌は引きつり、青ざめていた。

「私はカヌーンを、忠実な家臣であり、友であると思っていたのに私の頼みを聞かず、その忌み子を盗んだのですね？」

「私は確かに、陛下の忠実な家臣です。だからこそ、お助けしたのです。いつかあなた様が、姫様を思い出す時のために」

「私が後悔するとても？」

沈黙が続いた。

「…… よろしい。お前の友情を信じましょう」

カヌーンがほっとするのに目を細め、女王は続ける。

「ただし。私に娘など、存在したことはありません。私の信じるカヌーンの友情が、私を裏切ることはないのですから。ですから、近衛隊長。妙な噂が立たぬよう、カヌーンを除き、この場の者共を永遠に沈黙させなさい」

その場の僅かな困惑の間にも、バルコニーの上の若い近衛隊長が、後ろに控えていた他の近衛兵二人へ、抜いた曲刀を向けた。そしてぎよっとする彼らを切り捨てた。

そのまま近衛隊長はバルコニーを飛び降り、滑るようにサイルたちへ近寄った。骨が折れてもおかしくない高さのはずだが、彼の足取りはしっかりしていた。

身動きも出来ないリカーを背に庇い、サイルは刃の前に立っていた。近衛隊長は、サイルの一族の力を知っていながら、怯む様子はない。

サイルの脇腹を、大気を突いて寄る剣が裂こうとする。サイルは手枷を叩きつけ、その剣先を砕いたが、相手はサイルはおるか自分の右手も立て直さぬうちに、左手の剣を持ち上げて、がらあきになったサイルの片腹を狙う。サイルは肉薄した剣を、相手の懐へ飛び込むことで避け、地を蹴った勢いで跳ね上がり、頭突きを食らわせようとした。

だが、近衛隊長は驚くほどの俊敏さで上半身を引き、それを交わした。さらに、ままならぬはずの体制から、折れ残った剣が繰り出され、サイルに迫る。サイルは再び手枷を振り下ろしたのだが、それが咄たと気づいた時には、相手の右手に、腰帯から抜いた新たな剣が光っている。サイルの鎖骨の間に、今にも深々と、剣の先が入ろうとする。人間離れた顎の力で押しとどめる。相手も異常な力で剣を握ったまま、剣は一瞬二人の間で静止した。

サイルは手加減せず近衛隊長の腕を蹴り上げた。鈍い音がして相手の腕が曲がり、力が弱まった隙に、サイルは剣を放し、距離をとった。相手はわずかに眉を寄せただけで痛みに耐え、剣を握りなお

している。

サイルは舌を巻いた。

近衛隊長ばかりを睨んでいたサイルの腕を、リカーが引つ張った。

「ここは、ミーサークを呼んで逃げてください」

「そう言うが、チビ竜を置いていくわけにはいかない。俺は檻を碎いてでも、竜を逃がすのが使命だからな。ついでに、ミーサークを逃がしてくれた、あんたも助けてやろうか？」

「あの小さな竜は、陛下の宮殿にいるはずです。私が助けて見せませう。私は、逃げません。父の話が真実ならば、私には、あの方の心を治める責務があるのです」

リカーの頬を涙が伝っているのが、横目に見えた。

リカーの言葉を聞いて女王が、バルコニーから耳障りな高い声で笑った。

女王はバルコニーに腰を落とし足を放り出すと、そのまま飛び降りた。女王も怪我ひとつなくこちらに歩み寄る。

「娘よ。では、どうやって私を治めるのですか？ 見せてご覧」

サイルは近づく女王と、リカーとの間で大きく胸を張った。人間の女にとっては、サイルは強大すぎる壁のはずだった。

それでも女王は相変わらず、険悪な笑みを浮かべて、丸腰で近づいてくる。

「退きなさい、竜が舌」

女王が片手をあげ、指先をひらひら動かしたかと思うと、その指が風に踊る草の葉ようにくねり、見る間にぶ厚く巨大になり、鋭く尖った。まるで竜の爪だ。

爪の輝きはサイルに、本能的な危機を感じさせた。

「おい。その女を相手取るな」

その場に老人の囁き声が割り込んだ。

「こつちへおいで。もうちよつと後ろ。後ろじゃよ」

なんと、サイルが牢で聞いた幻聴の声だった。

サイルがうろたえている間にも、女王は軽やかに地を跳んで、思い

がけない速さで、肉薄していた。

そしてサイルの目へ、その得体の知れない爪を突き出した。サイルは咄嗟に首をかしげて、辛うじて爪をかわした。かすったこめかみから血が滴った。

サイルは正体不明な女王の爪を掴み、とにかく女王に膝を突かせようと力を込めて引いた。だが、サイルの腕は、女王の腕を取ったまま少しも動かなかった。女王の腕が、サイルの怪力にも動かなかったのだ。

「力自慢が、お前だけだと思つのですか」

女王に足払いをかける。女王の足首を折るつもりで。女王は眉根を寄せて視線を落とした。細く美しいままの足ではなく、靴に泥がついたのを気にしている。サイルの手を離して、汚れを撫ぜる。

後ずさつて逃れたサイルは、美貌の女王をまじまじと凝視した。

今のは何だ。

近衛隊長といい、女王といい、サイルと同じ人外の力を持っているかのようだ。

真後ろでリカーの短い悲鳴がした。

驚いて振り返る先に、リカーの姿はない。ただ、竜棚の中庭に敷かれた石畳に忽然と穴が開いているだけだった。

首をかしげる間もなく、サイルの足元でも石畳が落ちた。不意に開いた穴の中へ転がり落ち、暗い土に尻餅をつく。石畳は頭上で元に戻り穴を塞ぎ、途端に、竜棚の騒音が遠くなった。

立て続けに、頭上で重い音がして、悲鳴と共に影が幾つも落ちてきた。中庭にいた、女王に処分されかけた近衛兵たちのようだった。暗闇を見渡すと、一つの灯りが揺れていた。古めかしいランプは、老人の手に握られている。灯りはサイルたちが納まっている狭い空洞と、さっきまで足の下にあった石畳を、頭上に照らしていた。

「遅くなって、すまかったのう」

幻聴だったはずのしわがれた囁きが、老人の口から発された。

「久しく、扉を開かなかったもので、多くの石材が、わしのことを

忘れて言うことを聞かなかったのじゃ。間に合ってよかった」

リカーが立ち上がって叫んだ。

「ここはどこ。陛下はどこですか。私は陛下のもとへ。陛下は、悪意に捕らわれておいでです。お救いしなくては。あの方が私のお母様ならば、なおさら」

サイルはリカーを齒がゆく思い、舌打ちをした。つい今しがた、実の子と知ったうえで目撃者ともども始末されそうになったではないか。

老人が低く囁く。

「女王を人間と、まして母なんぞと思わんことじゃ。お嬢さん、あなたは墓も無く、葬られていたのじゃよ。こう言えはいいかのう。お嬢さんの母は、もうこの世には存在せんのだよ」

「悪意の根を枯らすことで、あの方はきつと人に戻れるはずです」  
リカーが老人に反論している。どうやら、老人はサイルの幻聴でも、幻でもないらしい。

「女王は、望んで悪意を飼っているのだ。女王は望んで人ではないのじゃ。わしは、あの女を知っておる。あの女が危険じゃということ、よく知っておる。お嬢さんも、さっきは少し味わったんじゃないかのう。頭が冷えるころには、身体も冷えておるかもしれんぞ」  
「いいえ。私が証明して見せます。あの方の情を」

リカーはそう言つて、ここが竜棚の地下だと分かるや、天井へ登ろうとしている。サイルはため息をついた。女王に見つかれば、彼女はろくでもない目に合うに決まっている。

リカーの腰帯を引っ張って引き降ろすと、枷つきの腕で小脇に抱えた。

老人が、打って変わって明るい調子で笑った。

「竜が舌の青年よ。お嬢さんよ。近衛さんたちよ。逃げるなら、わしの屋敷にどうじゃ。小さな竜も取り戻したいのじゃろう？ 返してあげよう。このわしがのう」

#### 【第四話】 都の地下

老人は、身軽に、暗闇の充満する通路を進んでいった。

老人が言うには、この通路は、都の地下に張り巡らされた、王族のための古い非常用通路だという。他国の侵略を受けた時に、この通路を使って都の外に逃げ出るためにある。しかし何世代も前から使われず、ついには王族すら知らない隠し通路となっているらしい。女王が追おうにも、この道は迷路になっており、簡単には見つからないということだ。

なぜ、そんな道をこの老人が知っているのか。

「わしが、管理人として【奇招じ】から、この通路を継いだのじゃ。その石の天井には、心がある。月干しにして心を育むのじゃよ。石たちは、わしの言うことしか聞かぬよ」

「【奇招じ】……それは」

幼竜を救うことを優先して、大人しくついてきていたリカーが、驚いて顔を老人に向けた。

「それは、メシユメシユさんのことですか？」

今度は、ハムスが驚いた顔をした。

「違うよ。あれは、ずっと昔にへまをして、宮殿から追放された。

わしに秘宝を託したのは、あれの孫娘だ」

老人は笑顔になり、愛しそうにリカーの手を撫ぜる。

「メシユメシユを知っているのかい。おいで。お茶を飲んでいっっておくれ。メシユメシユの近況を教えておくれ。そうしたら、竜と一緒に、都からお前さんたちを逃がしてあげよう。この、地下通路を使ってじゃ。おや、この地下通路から出してやろう、というのが正しいかのう。そうだ。竜が舌の青年、お前さんの枷も外す方法がある。そのままじゃ困るじゃろう」

頭上の石畳の隙間から、仄かな光と土の欠片と、どうやら町のざわめきらしい物音が、増幅され曖昧にぼやけて、風も無い通路にい

つまでも反響していた。通路の壁にも床にも、木の根が巡っている。ドラゴンバザールを造る時に、切り倒された町の植樹だろう。

やがて、地上も静かになり、時折思ひ出したように、人の声や物音が降るだけになった。

初めての上り階段が見えた。

階段を上がって、ランプが置かれた踊り場につくと、そこは植物園だった。大樹の描かれた大きな絨毯が敷かれ、小ぶりの花の舞ったあらゆる色とパターンの布が、壁を埋めている。鉢植えがあり、本物の草花もサイルが匂いでむせるほど咲いていた。

箆笥があり、姿見があり、本の山があり、本の山から山に渡された金の紐に、毛布や衣服が乱雑に吊るされてあった。足元には皿、水差しが転がって、新しい食事が残っている。何者かの生活が伺える。「ようこそ。わしの寢床へ。さあさあ、座っておくれ」

老人は、うず高く積まれた毛布や本を跨いでは、忙しく踊り場を駆け回った。植木鉢から溢れるほど成長したハーブの葉をむしり、金縁のガラスの水入れに入れて、上から茶をかけた。皆の周りを踊るように回って茶を配った。

「すまんね、この涼しい地下じゃが、冷えたお茶で我慢しておくれ。沸かそうにも、昼間の宮殿の厨房は人で一杯だ。忍び込めないのじやよ」

「宮殿に忍び込む？ そんなことが、できるのか？」

「そうじゃよ。夜の宮殿は、我が屋敷。金銀財宝から、秘密の書庫、上等の羊の肉の場所まで、心得とるよ」

では、小さな竜を取り戻すというのも、本気で言うのだろうか。

サイルは、どっかりと音を立て茶の前に腰を下ろした。

「俺にできる礼ならする。手を貸してくれ」

老人は、うまそうに茶を飲んだ。

「竜のためとなると、随分しおらしいことを言いおる。竜が舌のサイル。お前さんの一族にとっては、竜は憎い支配者のはずじやろう」  
サイルは表情が固まるのを感じた。

「俺の人生は、竜のおかげである」

やっとそれだけ言った。

「そうか。良いとも。わしの名はハムスじゃ」

老人の名に、近衛兵たちがはっとした。

近衛兵が宮殿にまつわる噂話を一つ語った。昔、女王の怒りを買った一人の老賢者が、処刑として、宮殿のアーチ開門の、夏日のあたる床に下半身を塗り込められた。数日のうちに老人は衰弱し、やがて抜け殻となって、亡骸は完全に床に埋められた。賢者はなお女王を恨み、夜な夜な寝静まった宮殿の床や壁の中をうろつき、物音やひそひそ声を立てるといふ、怪談話だ。

「その賢者の名がハムスと言う。實在の人物で、その処刑も実際に行われた。ほんの、十余年前の出来事だ」

注視を受けて、老人ハムスは目を伏せた。隠した唇を弓形に形作るのは、さきほどまでの陽気さではなく、自嘲のようだった。急に、深い皺に沿いあごに沿い、ひびのような影が落ちた。

「当時【奇招じ】として召抱えられていたメシメシの孫娘が、わしを壁に埋めるふりをして、隠し通路に逃がしてくれた。だが、わしの心は、完璧なまでに女王に屈し、娘がある罪で処刑される時も、助けにはいけなんだ。万能の力を持ち、時に戦でさえ左右する力を持つという妖術師・奇招じじゃが、女王は無防備な寝込みを襲った。……その後わしは何度か、都で刺客を雇って、女王を暗殺しようとした。わし自身が行く勇気が、無いものじゃから。刺客たちは、ことごとく散った。最後に刺客を送った時、わしは、助太刀しようとして、壁から女王の部屋を見張った。そして悟った。人には、女王は倒せんのだ」と

ハムスは、信じられないかもしれないが、と前置きした。

「刺客は、女王の喉を裂いた。胸を、腹を貫いた。頭蓋を割った」

ハムスは自分の身を抱いてうつむいた。

「女王は倒れもしなかった。笑っておったのじゃ。女王は自分の胸に刺さった血まみれの刃を、自ら抜き、刺客の喉に突き立てた」

ハムスはしばらく沈黙し、やっと上向いたその視線は、サイルを捕らえた。

「女王には、竜王ケトムの庇護がある。女王は、竜が舌よりも強力じゃ。そして、不死身なのじゃ」

十余年前だ。

ハムスは語った。

国の誰もが知っている通り、ある春の日、王が没した。大臣たちに国政を任せっぱなしの道楽者だったが、それでも人々は朗らかな国王を敬愛しており、悼んだものだった。

ヤトレフ女王は当時うら若い可憐な皇后であり、子は無くとも、王とは強く結ばれていた。気性は王に似ていたが、優しくかった。

国王の最後の日、ヤトレフと国王は、近衛兵らとこっそり公務を抜け出して、行楽に興じていた。そこを野獣に襲われ、ヤトレフ以外は全員命を落としたのだ。

ヤトレフに怪我は無かったものの、心に傷を負い、彼女は昏々と眠り続けた。ハムスは当時【薬練り】と呼ばれる薬の賢者であり、その知識を総動員して、侍医とともに治療にあたった。カヌーンは、つきつきりでそれを見守った。

一カ月後にやっと目覚めた時、ヤトレフは朦朧としながらも、国王の安否を問うた。後に彼女自身がカヌーンに話したことには、国王は彼女の前で獣に襲われたらしい。詳しい状況は今でも語られないが、その場に残った痕跡から察するに、恐ろしい最後だったらしい。ヤトレフは自分の記憶を信じたくなかったのだろうが、周囲の表情で、悟らざるを得なかった。

ヤトレフは、誰とも口をきかず、食事も取らず、眠らなかつた。夜闇の中で、彼女の目は光を発するほどに執拗に、何かを見つめていた。繰り返し惨劇を反芻しているらしく、うわごとのように、国王最後の日の会話を繰り返した。ヤトレフの顔は灰色になり、髪は抜けて乱れ、やせ細った。病の臭いがまとわりついていた。

半年がたった頃、

「獣を討ち取りました。この熊でございましょう?」

それらしい獣をしとめるべく、砂漠に出ていた家臣たちが帰ってきた。ヤトレフの部屋に、巨大な赤い一角熊の頭が運ばれた。砂色の熊の毛が、血に染まったものだった。家臣は純粹に敵に報いを与え、彼女の気を晴らしてやりたかったにすぎない。

ヤトレフは、大粒の涙をこぼしながら、唇の両端を歪めた。笑ったのだ。

「そうだ。私が生き残ったのは、あやつに報復し、血に塗すためだ」  
目は一角熊でも家臣でもなく虚空を見つめ、息は上がり、力の籠った顎から齒軋りの音がした。一見、報復を果たして暗い喜びに満たされたかに見えた。しかしその笑みに、家臣たちは言い知れない不安を覚えた。

ヤトレフは回復すると、家畜用にと、竜を捕らえてくるよう命じた。

野にいた竜が捕らわれ、差し出された。無理矢理連れてこられた竜は、当時まだ失われていなかった言葉で文句を言った。ヤトレフは人払いをし、私室のバルコニーに竜を収め、共にすごした。最初は低く聞こえていた竜の言葉が、意味を持たぬ苦悶の呻きに変わった。ハムスとカヌーンは、ヤトレフたちを襲ったのが竜であることを知った。

数日後、ヤトレフは竜と共に姿を消した。

兵と国中の民が探し回っても、ヤトレフを見つけることはできなかった。痛めつけていた竜の反撃によって女王は奪われたのだと、判断せざるを得なかった。カヌーンは人目もはばからず泣いた。

国王とヤトレフの間に子は無く、王族の一人が王位につくことに決まったが、その継承式の前夜に、地響きが響き、宮殿が揺れた。家臣たちが音の出たヤトレフの部屋に駆け込むと、裸のヤトレフが、半壊したバルコニーの手すりに腰掛けていた。三日月の光を背にして、淡く縁取られたその表情は見えなかった。

その後ヤトレフは、異を唱える者たちが動くよりも早く、それら

を無実の罪で追放し、王族をも幽閉、国外へ追放し、女王になった。夜毎、女王の塔の周囲には竜の影が目撃された。女王が竜に支配されているに違いないと、ハムスたちは囁きあった。女王の酒に、毒蛙の皮膚からとった眠りの薬を入れて、指折りの戦士たちとともに隠し通路に潜んで、討伐すべく竜を待った。

強めにもった薬の効果なく、女王は起き上がった。

女王は危なげなく、冷たく照るタイルを裸足で歩いて、バルコニーに立った。

女王がバルコニーに立つと、一瞬で静寂と暗闇が部屋を覆った。その暗闇の中から、光る巨大な目玉が現れた。女王は手すりを踏み台にし、暗闇をよじ登った。暗闇は、やはり何の音も立てず、バルコニーを飛び越えて消えた。信じられない大きさのその背中と尾が、静かに矢のように早く泳ぐのが、最後に見えた。

壁の中のハムスたちは、誰もが恐怖に動けなかった。あれほど巨大な竜を、誰も見たことが無かった。

明け方、朝日が遮られたかと思うと、女王が戻っていた。カヌーンは隠し部屋から飛び出し、泣きながら女王の無事を確かめるや、問い、咎めた。

女王はこともなげに告げた。

「あれは竜王。名を、ケトムというそうですよ」  
獣の分際で名があるのですよ、と笑った。

「私は、あの竜と、懇意なのです。お前たち、羨ましがすることはありません。もうじき、足るほどに手に入るのですから」

家臣たちは自分の進退を省みず、竜王に関わらぬよう、必死に進言した。しかし女王は意に介さなかった。ハムスとカヌー、そして数人の家臣を除き、竜王を見た者の舌を切って他言を禁じたうえに、失脚させた。

やがて竜たちは知能と炎、感じ合う力を失った。女王はそれを、自分が竜王に奪わせたのだと言った。

女王は言葉通り、竜たちを民に与えた。竜に関する法を無数に作

り、家畜以下として扱うよう触れを出した。竜を研究するという目的の元に竜を生きたまま解体することもあった。

カヌーンはあくまで、女王を以前の女王に戻そうとしていた。ハムスにも、そのための助力が求められた。だが、ハムスは、女王を排斥するために、他国に幽閉されている王族と連絡を取った。

それが女王に知れ、ハムスは処刑される。

その語しばらく、女王は病に臥せた。ハムスの呪いと噂する者もいたが、今にして思えば、女王はリカーを身ごもっていたのだ。

カヌーンとの子供だろう。カヌーンは、国王の変わりに、恋人の温もりで女王を癒そうとしたに違いない。だが、女王はその子リカーを捨てた。

その前後から、竜王は姿を見せなくなり、災厄は退いたかに見えた。

しかし、女王の竜への執着はますます強くなる。女王は自ら、半人半獣の軍馬に乗り竜狩りを行った。

「女王の竜狂いを止められる者はおらん。力をかしている竜王の気が変わらんかぎりは」

ハムスが重苦しく呟く。

「王の力で、女王の寿命は竜並みに長く続くじやろう。この国の未来を思うと、わしの古い先短いことが、救いにすら感じるのじやよ。そして、どうせ終わるのなら、一つ抗ってみようと思うのじや。これは復讐なのじやよ。女王の弄ぼうとした、竜の赤子と、竜が舌を逃がす、それだけが」

## 【第五話】 幼子の救い手

水差しの中に、水と握り拳一杯の塩を入れて、サイルの腕の枷にかける。するとあれだけ頑丈だったものが、ほろほろと溶け落ちるではないか。

この素材は、ある文明を沈めた海に浮かぶ氷の島の欠片だった。どんな金属よりも硬く、日にも炎にも崩れず、ただ、故郷の海が春になると形を失うとおり、常温の塩水に触ればたちまち水になる。ハムスは昔、騎士たちの儀礼用の剣にと、その氷を【頑<sup>かたく</sup>な白】と名づけ都に持ち込んだ。一年前、サイルが竜棚の竜を全て逃がしたことで、檻の強化のため、利用させることとなったのだ。

サイルは自由になった身体をのびした。休む間も無く、幼竜を救うべく、サイルはハムスについて踊り場を離れ階段をのぼる。後ろにはリカーが続く。幼竜のあやし役としてゆずらなかったのだ。

地下通路は宮殿の内壁と外壁との隙間へ入り込み、細く入り組んだ迷路となった。左右に曲がりくねり、時に柱の内側を梯子で登り、時に四つんばいでくぐった。さらには、通路がところどころ崩れてしまっているため、隠し扉を開けて、宮殿内の部屋や廊下に出て、次の隠し扉まで移動しなければならないこともあった。鼠のように、三人は急いで宮殿内を走り過ぎた。

隠し通路の途中、サイルは壁から風を感じた。壁に細い亀裂が生じ、風が吹き込んでいた。すぐ隣が外なのだ。

隙間から細い青空を見て、ミーサークを思った。無事にどこかに隠れているといいのだが。口笛を吹いて無事な姿を確認したいが、彼女には、複雑なこちらの事情は伝わらない。感応力を失ったため危機を感じ取れず、臆病をおして人目にその姿を晒してしまう。

ミーサークがサイルの胸を読めれば。

ミーサークがかつての力を取り戻せれば。

ミーサークともう一度話ができれば。

失われたかつてを思うと、悔しさと悲しみでサイルの視界は揺れる。

壁から目を離すと、リカーの視線に気づいた。彼女はサイルの若緑色の髪を見ていた。

「一年前、【檻砕きの竜が舌】が、竜棚を襲った時も、今回も。父は、私が尋ねると、知ってはならないと言ったのです。……あなたは、どういう方なのですか？」

言い終わる前に、自分が放った言葉がサイルの気に障ったことを、リカーは察知し、すばやく謝った。そして気遣わしげにサイルを見上げる。

「あんだ、俺の一族のことを知らないのか。後で教えてやる。だが今は駄目だ。こんな時に毛嫌いされても、面倒だ」

「ありえません。私はあなたが好きです」

リカーはサイルを睨むほど真剣に見つめて、はつきりと言った。大きな目の中に、不覚にも動揺した自分がいて、サイルは自分と目を見合わせた。

ハムスに急かされ、サイルがリカーから逃れようとしたのを、彼女は両手で掴んで引き止めた。

「サイルさんの悪意の病に、私は惑わされません、その底にあなたが見えます。今こうして、幼い竜を救おうと命をかける、サイルさんの得がたい真心が。どうして、そんな方を嫌うのですか」

呆然とした。こんな、会ったばかりの姫育ちの小娘が、自分をなぜこうまで肯定するのだ。呪われた自分の胸に、真心があるなどと断言するのだ。

逃げるようにリカーの手を打ち払うと、ハムスを追った。リカーも、それ以上何も言わずついてきた。

やがて通路の終着点に着いた。

ハムスは扉の隙間から中を伺った後、小さく手を叩いて、扉を撫ぜながら静かに押し開けた。サイルたちに手招きする。

部屋に入ると、視界のあちこちで金銀陶の光が滑る。金銀陶のみ

ならず、その部屋は手の込んだ刺繍やタイルの輝きで、床壁から、アーチの柱から、隅々まで飾られていた。華美な調度品も並ぶ。レースと金の刺繍の入った毛布を敷き、天蓋と雨のような輝石の鎖を備えた広い寝台が、円形の部屋のある中心にある。女王の寝室だった。

寝台の隣に、これも装飾で膨らんだテーブルがあつて、その上に【頑なな白】で作られた小鳥用の檻が乗っている。中に幼い竜がぎゅうぎゅう詰めにされていた。

リカーが駆け寄って背を触ると、幼い竜は目を開け、歓声を上げた。

幼竜は檻から開放され、ひとしきりリカーにまん丸いくちばしを押し付けた後、やっと気づいて、サイルとハムスに交互に見やる。サイルに向ける視線は好意的ではなかったが、リカーを見上げて、少し思案気だ。知恵を失くしてからどんな竜も見せなかった、複雑な表情だった。リカーを傷つけようとした敵であるはずのサイルに、リカーが敵意を持っていないのを感じ取り、困惑しているのだ。

「私たちは皆、あなたのお友達よ」

リカーが竜に聞かせる。ついでに、友達をすぐ噛んだり焼いたりしないよう、しつけてほしいものだ。

とにかく寝室から退散しようと、リカーを先に行かせ、自分も扉に入ろうと身を屈めたところで、サイルはまた音を聞いた。

ミーサークのものよりもずいぶん荒々しいが、それは確かに、竜のはばたきの音だ。ふりかえって、耳を済ませた。

大きい。竜騎兵の竜ではない。

強い風と共に、バルコニーから進入した大きな爪が、色とりどりのタイルを粉砕する。まず後ろ足の爪がめり込み宮殿を揺らし、前足の爪が、アーチ開門の天井に刺さる。すんだ紺色の鱗で覆われた、バルコニーが崩れるほどの大型な胸がめり込み、熱風を放つ。鱗のする音をさせながら、まきあがる土埃を纏って、首が薄闇の室内に入り込んだ。

それは五本の角で頭を覆われ、くちばしの脇にも牙のように二本の角を生やした、大型の雄竜だった。

「我らが希望よ。迎えに来たぞ」

竜は、低い声音で叫んだ。語りを使つてだ。

驚いて口も利けないサイルを見下ろして、不愉快そうに唸った。

「お前が件の、竜が舌か。幼い希望を救うのは、お前の人生の唯一の光だったかもしれない、だが、その光は我々のものだ」

言い終わらぬうちに、竜のその口から、炎が溢れてサイルを襲った。

サイルは強烈な威圧を感じた一瞬に、頭を後ろに引いて地に倒れ、炎を避けた。炎はサイルの体のすぐ上で文字通り踊った。光り輝き、くねって四肢をのびし、部屋の中を駆け回った。柔らかな寝台や絨毯が燃え上がった。サイルの服も焦げた。

「竜が舌なら、避けられるだろうとも」

どうやら、この竜が発したのは脅しの炎だったらしい。もし竜がその気であつたなら、サイルも無事ではなかったのだ。

「竜が舌よ。力が血に刻まれているのなら、我らの恐ろしさもそのはず。命が惜しくば、おとなしく我らの赤子を差し出せ」

この竜は知能を持っている。とすれば、感応能力もあり、当然事情を知っているはずだ。それなのに、幼竜を救おうとするサイルを、穏やかざる形相で睨む。サイルを頼った竜の母とは、随分考えが違ふようだ。

隠し通路から、騒動を聞いたリカーが幼竜と戻ってきた。

「おお、幼子よ」

雄竜は、翼についた鍵爪でサイルを虫のように弾き飛ばした。サイルに駆け寄ろうとするリカーを、竜の爪が床に押さえつける。

幼竜が、怒りの声を上げて雄竜の爪に炎を吐きかけた。

「ふむ。その人間を母と慕うのか。だがすぐに分かる、お前に必要なのは、我ら同胞だ。すぐに燃えてしまうもろい物など忘れる。知っているか、竜の鱗は、炎には負けんだぞ。さあ身をもつて知る

がいい」

喋る口から、ちらちらと炎が漏れ出ていた。

サイルは竜へ走った。竜の巨体ではなく、その爪先に向けて。拳を固め、しゃがみこむようにして体重を乗せて、懇親の力で竜の爪先を殴りつけた。サイルの拳と肩が不気味な音を立てた。それを代償に竜の爪も折れた。

サイルは素早くリカーを小脇に抱え、隠し扉に逃げ込んだ。

様子を見に戻ってきていたハムスをも痛めた肩に担ぎ、激痛に歯を食いしばりながら、隠し通路を走る。背後から、隠し扉をはじき飛ばし、炎が通路に入ってきた。

そんな時に限って、暗闇に転がっている、崩れた壁の欠片に足をとられる。

荷物を抱えたままサイルは勢いをつけて、壁に倒れこんだ。亀裂の入った壁に。石才が景気良く吹き飛んで、二人と一頭を抱えたまま宙へ飛び出した。追いかけてきた炎が、同じく穴から吹き出したが、竜の息が続かなかったのか、サイルたちに届く直前で霧散した。リカーとハムスが悲鳴を上げて、サイルにしがみつく。サイルは二人をしつかりと抱えた。幸い、真下には植木が見える。かなりの距離はあるが。

全身を風が叩き、身構えることもままならず、恐ろしい速度で、地上が近づく——その時突然、小脇に抱えているリカーが浮いた。サイルはリカーに縋った形で、不意に宙に吊られた。三人は螺旋を描いて、ゆっくりと地上に近づく。見上げてみれば、サイルらの恐怖を感じ取った幼竜が、リカーの腰帯を後ろ足で掴んで、未だ鱗もまばらな翼を一杯に広げ滑空していた。

目を開けたリカーが、愛おしそうに幼竜を見上げた。

「ありがとう、ウィラーダ」

ウィラーダ。母親代わりのリカーは、小さな竜をそう名づけたらしい。名に応えるのかそうでないのか、小さな竜は甲高く鳴いた。

あの雄竜が追ってこない。

雄竜は、宮殿の最上部のバルコニーから身を乗り出し、集まっていた竜騎兵相手に炎を吐いていた。竜騎兵は、数で雄竜を包囲している。

植木に不時着するなり、宮殿へ向かおうとしたサイルを、ハムスが止めた。

「無理じゃ。いくらお前さんでも、竜騎兵を相手にして、助けだせんよ」

「みすみす女王に渡すわけにはいかない。俺は竜を助ける。必ず。俺ならできる。俺の力は、竜の檻を砕く、その為にあるんだ」

「お前さんは、ウィラーダの未来を預かったはずじゃ。それに、ミ―サークも、お前さんを待つとるじゃないか」

サイルは惑った。

とにかく、木から下り、一番近くにあった隠し扉から地下通路に入り、ハムスの寢床まで走った。

無事を喜んで、ハムスの酒で祝杯をあげようとする近衛兵士たちを急かして、通路をひた走った。

王都の外壁の下をもぐり、通路の果てに行き着いた。扉を開けると、砂と眩しい日差しとが通路に吹き込んだ。

そこは、都から少し離れた、砂漠の真ん中だった。

皆が沙漠に這い出るが、ハムスは、穴に入ったままだった。リカーの手を握ったまま、達者で、という同じ意味の言葉を繰り返している。その目には涙が滲んでいる。植物の相手や、壁の中から人に喋りかけて脅かす悪戯、どこかから拝借してきた本の知識が、これまで彼をなくさめてきた、だが、完全には心を満たしてくれなかったのだ。

「あんたも逃げな、じいさん」

サイルは言うなり、ハムスを穴から拾い上げた。竜棚から逃げる時に、ハムスは地下通路を知られる危険を犯して、サイルたちを助けてくれた。女王の手が伸びる可能性のある場所に、彼を残す気にはなれなかった。

サイルは入れ替わりに通路に下りた。

「まさか、戻る気ではないじゃろうな」

「一人で行かせてくれ。あんたたちを守る自信が無い」

ハムスは苦しげな顔でしばらくサイルを見ていたが、やがてため息を一つ吐いて、ぎゅっと拳を握り、拳から流れた汗を、サイルの手のひらに落とした。

「これで、扉たちは、お前さんをわしの友だと判断するじゃろう。

念ずれば所々の石才が、道を作ってくれるはずじゃ。わしは、足手まといになつてはいかんで、ここでお前さんを待つとるよ」

「干乾びるぞ」

「だから、早く戻つてるんじゃよ」

「……俺が、日暮れに戻らなければ、旅の商隊にでも紛れてオアシスに向かつてくれ。その時は、ミーサークを頼む」

口笛を吹いて、ミーサークを呼び寄せた。

やはり竜騎兵から逃れ得ていたミーサークは、遠い空からやってきた。

ミーサークの繊細すぎる心を思うと申し訳なかったが、サイルはこの場で待つよう合図を送った。案の定、不安そうに鳴いた。

ミーサークの頭を抱いてなぐさめながら、サイルは、面倒な人物をちらりと見た。

リカーがウィラーダを抱えたまま、強い主張で瞳をきらめかせている。サイルは疲れを感じた。どうやって、意外に強情なこの娘を逃げる気にさせようか。いつそ無理矢理ミーサークの背にくくりつけてやるうか。そんなサイルの思案を感じ取って、ウィラーダが牙を見せる。

「私が、お母様を説得して、あの竜を解放してもらいます」

「あんたの母親が女王だとして」

サイルは半ば呆れて言った。

「どうしてこだわる。命をかけてまで」

リカーの目にひらめきと悲しみが浮かんだ。何か言いかけた口を、

静かに閉じる。

「足手まといだ。かと言って、見殺しにするのは気分が悪い。来ないでくれ」

リカーはしばらくうつむいていたが、抱えているウィラーダをサイルに差し出した。

「ウィラーダ。分かる？ サイルさんはあなたを、お母様から預かったの。サイルさんは、お母様と、私と、同じように、あなたを大事に思っているのよ。噛んでは駄目。炎もよ。彼の無事を祈るの。ここで一緒に待ちましよう。さあ。抱きしめて」

言うなり、リカーはサイルの左脇に、桃色の柔らかい鱗をしたウィラーダを押し込んだ。サイルは身構えたが、ウィラーダは少しもがきはしたものの、爪を立てるまではしなかった。

「……母親の言うことだけは聞くのか。大した赤ん坊だな」

サイルはウィラーダを抱え上げて、その瞳を覗いた。虹色の瞳は、サイルを覗む。

彼らに見送られて、サイルは再び地下にもぐった。

## 【第六話】 囚われの巨竜

サイルは暗い地下通路を、ハムスから借りた灯りと、自分の記憶と感覚を頼りに宮殿の方向に走った。

やがて、不時着した箇所から這い出て、騒動の聞こえる方へこっそりと近づいた。見知らぬ花で満ちた豊かな庭園を、樹陰に潜んでうかがった。

折れ散らかった庭園の樹の中心で、雄竜が低い苦しげな声を発していた。隣には女王の柔らかな笑い声があった。

「この竜といい、ハムスといい、隠れ暮らしていればよかったものを」

「私と引き換えに、貴様は逃がしたのだ。未来の報復の種をな」

真つ赤な炎と熱気が、閃光ほどに鋭く辺りを照らした。悲鳴や呻き声が上がる中、女王は高く笑う。

さらに、女王は近衛隊長を呼び命じた。

「賊は、ハムスと竜の子と、……あの娘と共に、通路に潜んでいるでしょう。都中の油を宮殿に集め、地下には【酸女<sup>さんめ</sup>の涙】をお流しなさい。この雄竜は竜棚へ閉じ込めるのです。明日、解体しましょう」

サイルの潜む園庭の背の低い木の陰から、周囲が見渡せた。

庭園は、サイルが名も知らない木々や花の、残骸で溢れていた。女王が、うろたえる兵士たちを尻目に裸で立ち、静かな笑みを湛えている。

女王の衣服と、足元と背後の樹木までもが消滅していることからして、竜は女王に向けて、相当な火炎を放ったらしい。だが衣服を失った女王の肌は、少しのかげりも無く、より白く妖しく目に痛かった。

あの火炎を浴びて、なぜ無事なのか。それが竜王を手懐けて得た力の、片鱗なのか。

サイルは寒気を感じた。

女王は、近衛隊長が差し出すマントを身にまとい、雄竜に背をむけ、園庭を出て行った。

昏針を打たれても、雄竜は抵抗を続けていた。それを、騎兵の竜たちが複数で押さえ込んでいた。この場に飛び込んだところで、手は無い。サイルは唇を噛んで様子を見守った。

あたりには、しきりに銀器を叩くような音が響く。騎兵が自分たちの竜に合図しているのだ。

やがて、昏針をしこたま食らって弱った雄竜は、【頑なな白】で作った鎖で騎兵の竜に吊り上げられた。サイルはその行く先を見送った。どうやらドラゴンバザールに降りたようだ。

サイルは隠し通路を辿った。

来る時は感じなかった、鋭い匂いが鼻につく。それに、遠くから、ばしゃばしゃと無遠慮な水音も聞こえる。不気味ではあったが、サイルはひとまず竜棚の地下へ急いだ。

たどり着いた時、雄竜と竜騎兵は、まさに竜棚の中庭にいた。

サイルが頭上の気配を伺っていると、突然、足に鋭い何かに触れる。痛みとも気づかぬうちに飛び上がった。どこからか通路に流れ込んで来た水が、足を舐め、激痛を与えたのだ。水に触れた足は赤くただれている。サイルはあわてて、狭い通路の両壁に両手を突っ張り、壁を登った。

その水に触れるなり、地下通路に残る樹木の根が音を立て崩れていった。酸のようだ。

女王は近衛隊長に命じ、これを地下に潜んでいるハムスやサイルたちへの、自分の娘への処遇としたのだ。急激に増した水嵩は、逃げる間を与えまいとする女王の冷酷な意思を感じさせた。しかも、これだけの水を用意するには、都人の生活水である貯水塔の水を使っただけだ。

追い詰められたサイルは、頭の上の石畳を開けようとした。目的の石は沈黙していたが、幸い少し離れた石の戸が応えてわずかに開い

た。

隙間から見たのは、日陰になった石畳と、竜と人間の足元だった。竜騎兵の足が数個頭上を行き過ぎた。続いて、引きずられながら一際大きな竜の足が過ぎかかる。雄竜の足だ。

そうしている間にも、下から酸が悪臭としぶきをあげ、水嵩を増す。

サイルは雄竜の腹が頭上に差し掛かった時、腹影に這い出た

「なんと言ったことだ」

雄竜が嘆くのも構わず、腹の下に隠れたまま這って、回廊に移動した。

騎兵たちは、回廊に巡った滑車を使い、竜数頭がかりで雄竜を部屋まで引きずった。

サイルも、雄竜の影に隠れたまま竜用の部屋に入った。

竜商い会の者が昏針で毒を打ちに来る以外、サイルの追手も、女王の手先も、ほとんど雄竜の元を訪れなかった。赤い香辛料を混ぜ込んだ粥と飲み水が、ずっと部屋の隅においてあるが、雄竜は手をつけなかった。

一度、防火布を頭から被って、ナキが部屋に入ってきた。

ナキは恐々と竜を眺めながら、しばらく何をするでもなく檻の中をうろつろし、餌の皿を、距離を取りつつも精一杯竜に差し出してみたりした。

「……君は知能があるんだってね」

やっとそう問いかけた。

「あのちっちゃな竜を逃がすために、宮殿を襲ったのかい。勇気があるんだね」

雄竜は無言だった。ナキは一人で喋った。

「女王陛下を、人間を恨んでいるかい。でも考えてみてよ。君たちは昔、赤い食べ物に出会えずに、ずっと飢えて暮らしていたんだよ。人間の香辛料があるから、偏食の君たちのお仲間も、今はお腹一杯に食べられるんじゃないかな」

雄竜はナキに牙を剥いて見せた。ナキは数歩下がったが、続けた。  
「今となつては、竜の労働力は、僕ら人間の生活に無くてはならないものなんだ。もしかして、僕たちもつと対等な関係で、支えあえると思わないかい」

対等に支えあう。

サイルの胸に、その言葉は僅かに夢を見せた。

それが適うのなら、いつか、人間と竜の関係は、修復し得るのかも知れない。サイルは竜の影からそつと、黄色の鼻先を見上げた。  
竜の口に炎がちらつくのを見ると、ナキは慌てて出て行つた。

「あんた、名前は」

日が暮れて竜棚にも闇が近づき、瞬き魚が光る。サイルは腹の下から雄竜へ問うた。答えが返つてこないかと思つたが、竜は呟いた。  
「私の名はマズナブ。私は、お前たちを炭にしようとした。それをわざわざ、私を助けるために戻るとは、お前は愚かだな。いや。そもそも、【檻砕き】など、酔狂でなければできぬか」

「自分を助けに来てくれたお仲間を見捨てたんじゃ、チビの教育に良くないんでな」

「逃れた後、私が幼子を連れて行くとは考えないのか」

そう、サイルは、ウィラーダやリカーたちを砂漠に待たせて、女王の危険に晒しているし、このマズナブという傲慢そうな竜の未知数の脅威にも、自ら近づこうとしている。

だが、サイルは未知数に、会いたかつた。他に生き残つた知能のある竜がいるなら、会いたい、ミーサークとウィラーダを会わせた。彼らの力になり、彼らに力になってほしい。

そして、彼らがかつての力を持ちえているように、ミーサークと世界の竜たちにその力が戻るようならば、なんだってするだろう。

マズナブはサイルの内心を読み取り、長々と沈黙した後、低く続ける。

「……力は全て、竜王に奪われている」

「竜の王が？ なぜ」

「あの王の考えは分らん。感じ取れんのだ、昔からな。力を取り戻すのは不可能だということだけは、はっきりしている。我らが力を残したのは偶然にすぎん」

サイルは落胆のため息を吐いた。

「なぜだ。なぜ竜に重きを置く。我ら一族の呪いだけとは思えん」  
問われると、サイルの胸に、誤魔化す間もなく真意が浮かんた。それを読み取り、マズナブは唸った。

「恩があるのは、ミーサークという竜だけだろう。それだけを、思いついていればいいものを。危ない橋を渡ってまで、一族を解放しようなどと、無謀な。あの母竜から、伝えられたとおりだ」

ウィラーダの母の、諦観と慈愛の籠った語りが、胸をよぎった。

「……あの竜は、砂になった」

「ああ、分かっている。私にも、存在がもう感じられない。若い竜でも、天寿を全うしないことはある」

サイルは周囲に気を配りながら、腹の影から出た。マズナブを振り返って、思わずうめいた。騎兵の竜たちに噛み砕かれて鱗はところどころ割れ、肉が裂け漆黒の血を流している。片目はえぐられ、翼も破れていた。

「かつての力を残す我らは、五頭で共に暮らしていた。ある時、我らの隠れ家近くに、人間が行き倒れた。私は放っておけといったのだが、母竜は、そいつを人間の町まで運んだ。そして捕らわれ、暴力で従わされ、森まで、人間どもの砂船を引いて戻って来たのだ。我らは暴力の苦痛を母竜から感じ取り、挫け、彼女を見限った。新たな命を抱えていることを、母竜は何度も、我々に訴えた」

竜は、つがい数十年を共に過ごした上で、初めて子を産む。知能を失った竜たちの多くは腹に卵を持ったまま、卵の存在を忘れ、新たな竜は望めそうも無いのだと言う。

「だが、それでも我らは、固く決意を守りあい、母竜もろともに諦めた」

「あんたは、それで良かったのか」

「もはや生きることが、苦痛に過ぎない。そう思っていた。それでも、とりわけ仲の良かった私だけはいつも母竜の思念を追って感じていた。彼女には、私と同じ苦しみと後悔と、迷いばかりがあった。だが彼女が力尽きた後、入れ替わりに、生れたばかりの幼子の、喜びが私に届いたのだ。久しく忘れていた。なんと鮮やかで、心打つ情か。これを守らねばならぬと思ったのだ。どれほど愚かであろうとも」

夜は更ける。サイルはじっと押し黙っていた。

## 【第七話】 火踊る夜

その夜、都市全体が不穏にざわめいていた。

竜棚の、マズナブの腹の下に隠れたサイルまでもがそれを感じた。

おまけに、酸の臭いの他にも、何かが焼ける強い悪臭が辺りに充満している。

「お一人ですか？」

竜商い会の男が、マズナブを見張っている竜騎兵へ問うのが聞こえた。

「見張りはお一人で足るのですか？」

失礼を承知で、と前置きし、男は【檻砕きの竜が舌】が襲ってきた場合の不安をもらした。

これに対し騎兵は、声を潜めて苦々しく言った。

「仕方ないのです。陛下のご命令で、酸を混ぜた水を運んだせいで、多くの騎兵も竜も弱って動けないのですよ。都人も、苦しんでいるとか」

「そうですか。しかし、カヌーン大臣のお嬢様を追う者が少ないのは、幸いかもしれませんね。おっと、失礼」

失言に気づいた竜商い会の男は、そそくさと騎兵から遠ざかった。そして彼は、マズナブに昏針を与えようと、射出機を持って部屋に近づいて来る。サイルは彼を、息を潜めて待っていた。

男が昏針を手に取りうと視線を落とした隙に、サイルはマズナブの影から出て忍び寄る。格子ごしに男の口を塞いで、ひったくった針をその腕に突き刺した。すぐさま毒が入り、ろくにもがきもせず、男は気を失った。サイルは彼の体を格子のそばにしゃがませ、首から提げていた射出機と、針の入った皮の包みを盗む。

格子の隙間から伺うと、回廊に警備兵が三人と、中庭に竜騎兵が一人いた。酸のせいで弱っている竜たちには悪いが、竜騎兵での警備が薄いのはありがたかった。

なにせ、怪我を負って飛べないマズナブを連れて、逃げ落ちなければならぬのだ。マズナブを隠せる場所へ——サイルの故郷へ。故郷。

その響きに、サイルの心身は不安に震えた。逃げ帰れる故郷など無い。大声で否定したかった。だが故郷以外のどこに身を隠せるだろう。故郷のある噂を聞いた際に、サイルは寂れた集落を思う。いつそ集落にある「あれ」が旅立てば、集落の噂なぞ聞かず、思い出すこともないのかもしれない。だが皮肉にも、あれだけが今、自分たちを守ってくれるのだ。

サイルは目を瞑り、邪念を払った。腰帯にしまい込んでいた、ハムスの塩瓶とマズナブの飲み水を使って、部屋の鍵を溶かして回廊にでる。

深呼吸し、見よう見まねで射出機を構え、竜騎会員の男の体の影から、警備兵と近衛兵へ昏針を放った。針のありつただけで竜騎兵と、警備兵二人を倒した。残った一人がうろたえているうちに、素早く走りより、腹を打って失神させた。手早く、倒れた兵たちを、マズナブの部屋の彼の影に、一まとめに隠しておいた。

「……幼子が、人に見つかったぞ。市場だ」

しばらく思考にふけるように黙り込んでいたマズナブが、そう言うて長い首を、視線を伸ばすようにドラゴンバザールへ向ける。なぜ、ウィラーダがそんな場所にいるのか。なぜ、人に囲まれているのか。

「娘たちが、お前を案じ戻ってきたのだ。今まで、お前が行くよりは目立たぬと思って、黙っていたが。脅威は無いが、人に囲まれ、面倒になりかねん」

最後まで聞かず、サイルは騎兵のターバンを奪って髪を隠し、走り出した。

ドラゴンバザールに走りこむ。

本来、闇に沈んでいるはずの広場には、赤みを帯びた光が差し込んでいた。

サイルは息を呑んだ。鮮やかな火の色に目が奪われる。町並みの向こうに、開けた夜空を、真っ赤に染めてそびえる、巨大な炎の柱があった。炎の奥に、かろうじて燃えているものの影が分かる。

宮殿だ。女王の居城が燃えていた。

サイルは直感した。あれは他でもない、女王がつけた火だ。サイルと、亡霊のような老人と、自分の娘を抹殺するために、隠し通路もろともに代々の王家の宝を燃やすのだ。

リカーの顔が浮かんた。彼女は、これを見ても女王を正せると思うのだろうか。

サイルはやっと周囲に目をやり、赤く染まったドラゴンバザールの一角に、寄り添い合うようにして、黒い人だかりがあるのに気がついた。火事を見に集まった都の民ではなさそうだ。皆燃え盛る宮殿ではなく、輪の中心を向いていた。

その中心に細身の少年がいて、胸に大事そうに何かを抱え、困った顔をしている。袖から覗いた桃色の光は、ウィラーダの鱗に違いない。

サイルは走り寄ると、人垣をちぎっては投げ、ちぎっては投げ、中心にいる男装したリカーから遠ざけた。

リカーはサイルに気付き、大きな瞳を安堵に細め、頬を緩めた。サイルは、彼女の無鉄砲に対する苛立ちを一瞬忘れた。自分を見て、そんな表情をする者を今まで知らなかった。

「なんだ君は。しまった、騎兵だ」

人々はサイルのかぶる騎兵用ターバンを見て、距離を置いた。サイルは彼らを睨み、そこで妙なことに気づいた。彼らは明かり一つも持たず、闇色の衣服で身を包み、目元以外をターバンで覆っていた。まるで盗賊だ。

その中の一人が、恐る恐る、懷に手を入れ、取り出した三枚の金貨をサイルへ渡した。

「私どもは今、商談中なんです。大事な、ね。どうか、見なかったことにしていただけませんでしょうかね？ 騎兵殿」

言い終わる間も無く、周囲に再び集まった人々は、リカーとウィラーダへ熱を帯びた視線を向け直す。

「私は3000万出す」

「貴方が3000万出すなら、私は3500万だ。いや、4000万だ」

彼らはリカーに向けて、それぞれ違った指の形を作り次々突き出す。子供じみて声高に数を唱える。

サイルは思い至った。競り市の作法で、彼らはウィラーダを買おうとしているのだ。もっとも、こんな夜中に競りが行われるはずはない。しかも金額が大き過ぎる。

サイルも聞いたことがあった。いつとも知れぬ夜に紛れて、金持ちたちと商人の間で、密かに不正規の競りが行われていると。都の権力者が一枚噛んでいるという噂もあり、取り締まるどころか、誰も実態を掴もうともしない闇市が、存在するのだと。これはその、

【月下市げっかいち】とやらの違いはない。

「4500万」

「5000万だ。どうだ」

一人の男が宣言すると、誰も、金額を上乗せしない。男は、嬉々としてウィラーダに近寄った。

「もう、何度もお伝えしたではありませんか。この子は売り物ではありません」

リカーが必死に言うと、男は笑った。

「女王に狙われているその竜を、隠し守ってやろうというのはですよ。悪い話ではないでしょう。貴女も、一緒に匿ってさしあげましょう。事情は存じておりますよ、リカー殿下」

男装の意味もなく、リカーの身分はばれているようだった。

頭を抱えるサイルの手を、後ろから引く者がある。見下ろしてぎよつとした。シヨールを被り、女髪の上を着たハムスが、隣でしなを作ってみせるのだ。

一体どうやって都に戻ったのか、そもそもなぜ戻ったか、問い詰め

ようとしたサイルへ、ハムスは沈黙を示す合図を送った。彼は、懐からうやうやしく取り出した輝石をサイルのてのひらに並べておいで、人ごみに身を隠した。なるほど。彼の意図を察し、

「一億」

サイルは片腕で値を示し、輝石を見せびらかしながら、声を上げた。リカーが駆け寄ってきた。

残念そうにざわめく人だかりに、サイルは声をかけた。

「俺は、いい買い物をして機嫌がいい」

輝石の大半を一応リカーに渡すふりをしながら、サイルは鋭い視線で彼らを観察していた。竜を買い逃した腹いせに、兵を呼ぶような者がいはいないか。

「おまけに、こんな騒動の夜で、荒ぶる血が抑えられない。そうだな。これから竜棚を襲ってみようか。檻砕きの……竜が舌の騒動に乗じてな。この、姫殿下を乗せて、もうじき花火みたいに、竜が放たれるだろう。どうだ、あんたたちの持つ竜を、一頭1000万で買ってやってもいいぞ。どうせなら、騒ぎは大きい方がいい。……竜が舌のせいにして、ちよつとした悪さをするのさ」

彼らを警戒しながらも、サイルは檻を砕かずにはいられなかった。一頭でも多く、空に帰す。

妙な沈黙が辺りに漂った。彼らは目配せをしあっている。そしてターバンから覗いている瞳は一樣に、怪しく笑った。彼らの多くは恐らく、刺激に飢えて月下市に来る富豪たちだ。競り負けるのが悔しかったとしても、それ以上の娯楽に、もう興味を奪われている。結局、その場にいたほとんどの竜持ちが乗った。

「笛の音が鳴ったら、竜を空に放て」

人垣は密やかに、散っていった。サイルも、リカーとハムスと共に、マズナブの待つ、竜棚へ戻った。

見張りと竜商い会の人間が倒れたことに、未だ気づいた者はいないようだった。サイルはハムスとリカーに、格子部屋の鍵を溶かしてまわらせ、自分も、竜商い会の訓練された竜たちの部屋を空けて

いく。その中でも大型の二頭を選んで、「商品」空運用の装具を負わせておいた。

ハムスとリカーの放った竜たちが、宮殿の赤い火を背景に、次々と空に舞い上がっている。竜商い会の竜たちも、自分を縛る物が無いことに気づくと、それに続いていった。今頃、警戒にあたっている竜騎兵たちは大慌てだろう。サイルは急いで、合流したりカーとハムスを空運用吊具に乗せた。

飛び立つ前に、サイルは中庭の騎兵の竜を振り返った。

口笛を吹いてみても、鱗に触ってみても、手綱を引いてみても、竜は無反応だった。他の竜と比べてひどく冷えたその鱗を撫ぜても、首すらも曲げてみせない。心まで失ってしまったかのようにだった。

「いつか。いつか。助けてやるからな」

サイルは竜の首を抱きしめて別れた。空運役の竜の手綱をとり、中庭を後にした。事態に気づいた竜商い会が騒ぎ出すが、もう遅い。貴族屋敷の上空を通過しながら、鋭く口笛を響かせる。すると屋敷から、幾筋もの鱗のきらめきが空へ登った。

貴族屋敷の者たちが手を振っているのを見て、リカーが、竜の背で立ち上がった。

屋敷の富豪たちにむかって、彼女は叫んだ。

「父にお伝えください。どうか、お体に気をつけてください。必ず、愛するあなたの元へ戻ります。……そして陛下にも。私が、あなたの心に浄化の雨を降らせましょう。あなたと竜に、語ら得る夜を与えましょう、と」

リカーはしばらく、遠ざかる王宮の火影を見詰めたまま微動だにしなかった。横目で様子を伺っていたサイルへ、振り返られないまま、呟く。

「陛下とは、お会いできません。あれほどのことを為してしまえる、あの方の力がある今は」

今の女王にとって、リカーが肉親どころか、消してしまいたい存在であると、女王はいとも簡単にそれを行うのだと、理解したらし

い。

「お父様は、悔やむかしら。こんな娘を守ったことを」

園庭で女王を見た時、そのそばにカヌーンはいなかった。大臣を許すとは言ったが、女王の発言をどこまで信じて良いのか。サイルは口にはしなかった。

感傷に浸るには未だ早い。一頭の竜騎兵がこちらに気づき、女王を頂くゆえに必死なのだろう、凄まじい速さで追ってきていた。それなのに、サイルたちを運ぶ竜商い会の竜は、悠長だ。

城壁門と飛び越え砂漠に出ると、聞きなれた鳴き声が前方から聞こえた。丘陵の影からミーサークが首を出し、砂と共に舞い上がった。

不安げなミーサークに、サイルは背後の竜騎兵が敵だと口笛で伝えた。

ミーサークは、騎兵が噛み付き爪を立てようとするのを、素早い翼で身を返して交わし、恐怖にはぼ目を閉じ身体を細くして、相手の背の上を滑るように竜とすれ違った。ミーサークの翼が騎兵の足をぶち、騎兵はあえなく背から転がり宙吊りになる。サイルが気の弱いミーサークに教え得た、唯一の戦い方だった。

ミーサークは戻ってきて、マズナブと首を並べた。

竜たちは休み無く飛び続けた。夜闇が、追っ手から姿を隠してくれた。空が白む頃、追っ手をまいた安堵に、やっと息をついた。

## 【第八話】 揺らぐ人生

飛び続けて昼近くなった頃。遠く続く砂の稜線の向こうに、こんもりとした砂山が現れた。山に近づくと、その周辺に、小さな集落があるのも見下ろせた。

ほんの二日前まで、よりによって国の王によって追われ、よりによってここに逃げ戻るなどと思ひもなかった。

サイルはミーカークと竜商じゅうあない会の竜に、地面に降りるよう合図をした。

砂山の頂上に降り立つと、盛り上がった地表が竜たちの重みにぐっと沈み、呼吸をする胸のようにまた膨らんだ。

砂を踏むなりハムスが悲鳴を上げる。道中、彼はずっとサイルの上着を被つてぐったりしていた。長く肌寒い地下にいた彼には、日差しと砂の熱さが堪えるのだ。ハムスはマズナブの足にのぼり、だが竜の体温にも負け、結局サイルにおぶさった。

サイルは用心深く周囲を見渡した。小さく見える集落から、人々が出て集まりつつある。名も知らない、しかし見知った顔があった。目を逸らした先にリカーがいた。

彼女はまだ少し暗い顔でいたが、ウィラーダが鼻先を上げ気遣わしげに鳴くのを見て、やっと柔らかな表情になった。

サイルは僅かな間迷った。自分のために危険を冒したりカーとハムスに、何を言うべきか。

サイルの沈黙を察したのか、ハムスが言い訳した。

「夕方になって、お譲ちゃんが、一人でも戻ると言ってきたからなの。戻ろうにも、地下通路には【酸女さんめの涙】が流し込まれておった。わしらは地上の街道で、来訪者を待ったのじゃ。そして、大道芸人の一座に紛れた。衣装まで借りたぞ。勿論ただでない。前払いとして、わしが前国王から賜った、大切な賢者の証しの首飾りをやったのじゃ。芸人らは大喜びして、もっと働いてやっても良いと言

ったほどじゃ。じゃから、わしのかわいい植物たちも、さいわい階段の高さのおかげで酸水に漬かっていなかったたので、都の大地に植えておいてもらったぞ」

その時、すでに宮殿には火がかけられており、都は混乱していたらしい。乗じて、ハムスは大道芸人たちに手伝わせ、力づくであちこちの石畳の扉を開けた。途中、酸のせいで何度も気分が悪くなつたらしいが、サイルが通路のどこかで酸に包囲され、身動きできなくなっているのではないかと考えると、どうにもじっとしていらなかつたらしい。その頃、サイルはマズナブと共に竜棚にいた。サイルの姿が無いので、ハムス是最悪の想像もしたというが、リカーが励まし、立ち上がらせた。宮殿を襲った竜が竜棚に囚われている話には、聞かずとも耳に入っていたので、二人はサイルが近くに潜んでいる可能性にかけてドラゴンバザールの広間で待った。いざとなつたら竜騎兵や竜商い会の人間を買収しようと、ハムスが宮殿から運んで貯めていた輝石も持ってきた。竜棚の兵にはねつけられたが、民の夜間外出を禁じた見回りの兵は、それでハムスたちを見逃した。なんとも危険を冒したものだ。呆れ、非難するのも億劫だった。一方で、手を尽くしてサイルを救おうとしたことへの礼が、一瞬だけ脳裏を掠めたのだがこれは意識して黙っていた。

その間に、砂山の周りにはすっかり人だかりができていた。サイルは声を張った。

「……帰ったぞ」

集落の人々は、憎しみに目を血走らせながらも、その唇を喜びに歪ませて、サイルを凝視している。

「もうじき竜騎兵が、俺を追って現れる。奴らの質問に口を**あましんじゅ**づぐんで、俺たちに水と食事を用意すれば、与えてやろう、【甘真珠】を」  
人々は言葉も交わさず、それぞれの家に走り、見る間に、貧しいながらも精一杯の食事を用意して、サイルの反応を待った。

サイルは、小さく息を吸った。唇を細く開き、長いため息を吐く。それは音色になった。ミーサークに送る合図の口笛よりも複雑な旋

律を、ささやかな抑揚をつけ、歌声ほどにも聞こえる色をつけて辿る。ミーサークがうつとりと目を閉じた。リカーとハムスたちも、この強面から生まれるとは思えない美しい響きに、驚いて聞き入っていた。

すぐに、砂山の中で多くの気配が騒ぎ出し、山が動いた。山はゆっくり静かに割れ、砂をまきながら八方に展開した。砂山の斜面は、内側を上向けて広がりきって、白藍色の内面を晒した。それは蕾のように集まっていた八枚の殻を開いた、巨大な貝だった。

滑らかな貝の身の中心に、つめ先くらいの大きさの象牙色の玉が、山になつて輝いており、その山に寝そべって、小さな亜人が十人ほど、こちらを眺めている。

サイルたちは、殻の開閉とともに砂漠に降りた。サイル以外の皆々は、貝の周囲に打ち寄せる砂の波にも驚いていた。一帯の砂が、水のように柔らかく流動しているのだ。

サイルは靴を脱いで、裸足で貝の身に登って近づいた。表面はすべすべして冷たく、懐かしい。

「もしや、彼女らは、【碧き乙姫】か？」

ハムスが興奮して、サイルの背中にしがみつく。【碧き乙姫】は、

【藍簞り】と呼ばれるこの巨大な貝の共生者と言われている。正確なことは、誰にも分からない。竜よりも、その歴史は長いといわれている。彼女らは、人の赤子に似た上半身と、鱗に覆われた魚の尾に似た下半身と羽衣のようなひれを持つ、半魚の亜人だ。高度な知能を持ちながらも、言葉を持たず、同胞とは歌で語らう。【藍簞り】の中にこもり、殻を閉じ、さらに周囲の景色に擬態してまで隠れ、頑なに他との接触を拒んできた。現に目の前の【碧き乙姫】たちも、サイル以外の訴えは拒絶し、腕力で殻を開かせることもできない。それは、この十余年ずっとそうだったらしい。この集落に、開かずの【藍簞り】が留まっているという噂は、離れた地で過ごすサイルの耳にも、度々入っていた。

サイルは、その存在に踏み入った。

「【甘真珠】を分けて貰えないか。それと、しばらく匿ってほしいんだ」

小さな碧き乙姫たちは反応を返さない。その瞳はサイルを向いているが、全く映っていないかにも見える。

サイルは、象牙色の玉・甘真珠を手のひら一杯に握ると、それを、藍籠りの外に放り投げた。

遠巻きに見ていた集落の人間たちが、真珠を追って四散した。

サイルは、竜商い会の竜たちに水と食事を与え、開放した。そして、二人と三頭だけを藍籠りの中に入れた。殻が持ち上がった、再び貝は閉じる。砂に擬態し、サイルたちを隠そうとしているのだ。

貝の中は涼しく、心地よい甘い臭いが漂っていた。

「都の誘いの市なら、もつといい薬草が手に入るんじゃないか」

ぶつぶつ言いながらハムスは、古巣からちゃっかり運んでいた薬類を並べた。【麦尾兔】むぎおつこぎの長い毛をあててマズナブの傷の出血を止めてから、丁寧<sup>おとなしみ</sup>に毛を取ると、遠方の海に住む【大太刀鮫】の乾燥

肝臓を煮詰めてすり潰し、傷に塗る。上から草編みの毛布で覆った。裂けた傷には、傷口近くに麻痺薬を染みさせておいて、細い草の繊維で、傷を縫い合わせた。目の傷は、毛皮で覆いを作った。

治療を終え、皆々貝の緩やかな曲線に背を預け、ぼんやりと休んだ。ハムスはすぐに盛大に寝息を立て始めた。碧き乙姫たちが、歌を邪魔されたと思ったのか、いつせいに沈黙して、見るとも無くハムスを見ている。

リカーがくすりと笑った。

「とても綺麗な種族ですね。御伽噺でしか、碧き乙姫の名も聞いたことがありませんでした。まさか、会う日が来るなんて。サイルさんは、彼女たちとお友達なのですか？」

少年のサイルが、ミーサークと遠出して、始めて藍籠りを見つけ、た真夜中、貝は、砂漠に流れる潮の上を彷徨っていた。貝の周囲の流砂の中には、土の魚やかに泳ぐ。砂から生まれ、砂の中を泳ぎながら崩れて砂に戻る。そして、また砂底から、新たな姿で現れる。

サイルが砂をすくうと、手の中から魚が生まれ、跳んだ。

周囲には誰かの歌声が漂っていた。短い旋律の繰り返しを覚えたサイルは、ミーサークとともに砂の潮に座り込んで浸りながら、それをなぞって口笛を吹いた。口笛はサイルがミーサークから教えられたばかりの楽しみだった。

すると、知らない間に潮の流れが変わり、藍簞りがそばで開いていた。

藍簞りはその場に居を定め、度々サイルをその中に招き入れた。ミーサークが、碧き乙姫の内心を感じて言ったことには、サイルの口笛が気に入ったとか。

彼女たちは、口笛の礼に、【甘真珠】という、世にも美味な宝をこの手に与えた。その宝の存在が、サイルの集落での立場を変えた。それは、サイルが手に入れた極めて有効な駆け引きの手段で、今回も力を振るった。なんにせよ、彼女たちは竜と同様、サイルの恩人であつた。

「この十余年、お前を待っていたのだ」

不意に、マズナブが低く言った。

「お前の歌うのを、もう一度、聴きたかったのだ。突然去つたお前を、待っていたのだ」

マズナブは、碧き乙姫たちの内心を伝えているのだ。

サイルは碧き乙姫たちを見つめた。彼女たちの瞳に心は表れない。だが、竜がその心との間に、幻のような橋をかける。彼女たちが、呪われたサイルを好んでいると言う。

「聞かせてください」

リカーに頼まれ、サイルは、砂漠の民なら誰もが知っている月を愛でる歌を奏でた。

リカーは目を閉じる。マズナブでさえ、耳を傾けていた。曲が終わると、リカーは笑みを引つ込めサイルを見つめる、その目を輝かせるのが、ただの好奇心ではないことを、サイルは分かり始めていた。

「教えてください。深い情を持つはずのあなたが、どうして人々からそれを隠し、どうして人々はあなたを遠ざけるのですか」

サイルが出会ったどんな人間とも、彼女は違っていた。サイルへ送る視線の澄んだ音も、訴える心も、熱も、他の誰とも違う。

サイルは、なるべくこともなさそうに言った。

「簡単なことだ。【竜が舌】<sup>じゅうがした</sup>ってのはな。竜に呪われたそのしもべで、人間の敵なんだ」

「あなたは竜の友です。一人の人間です」  
「違う」

若緑色の髪と、人間、亜人を上回る身体能力を持つサイルの一族は、【竜が舌】と呼ばれている。

千年の昔、その歴史は始まった。

当時、自然界に竜が食せる赤色の物は少なく、竜たちは皆飢え、痩せていたという。

そこで、竜王ケトムは、ある人間の都市を占拠し脅し、食料の提供を命じた。人間は香辛料や色粉を作り出し、木、岩、水、時に動物、あらゆるものを赤く色づけし、竜たちの食欲を満たした。

そして、竜王に気に入られようと、ある男が肉を用意した。その肉は竜王が涙するほど美味だったという。

「男が用意したのは、自分の妻と子だった」

竜王は喜んで、次々食料としての人間を用意させた。さらに、竜王は男の一族が誤って他の竜に食われぬように、目印としてその髪に若緑の色をつけた。優れた五感と怪力を与え、狩りを容易にさせた。

竜王と懇意になった一族は、竜の宴にも参加し、一族の女たちは人肉を調理し、男たちは自分たちもそれを食した。

「その罪深い連中が、俺の一族だ。竜の口まで食事を運ぶから、竜が舌と。だから人は皆俺を嫌遠するのさ。竜王が人間の味に飽き、一族がその寵愛を失うまで、人間を狩り続けた。最後は数で勝る人間によって駆逐されたんだ。力とこの髪は一族に残され、呪いにな

った。竜王は飢えのあまり俺たちを利用したが、同時に俺たちを嫌悪し呪ったんだ。このうえない危険な、邪悪なものとして、こうして世界に知らしめているんだ」

二人は黙り込んだ。

サイルの脳裏には、苦痛が蘇っていた。

サイルに身寄りはなく、物心ついた時にはこの集落のある一家に、奴隷として使われていた。毎日大人以上の労働を強いられ、四六時中激しい叱咤と暴力を浴びた。男も女も老人も子供も、サイルを心持つ亜人と認めず、存在してはならない罪悪なのだとあらゆる方法でサイルに教え込んだ。彼ら自身も、虐げられ砂漠に追いやられた古い一族であり、オアシスの無い貧しい暮らしの鬱憤を、サイルを痛めつけることで晴らした。繰り返し蔑視と暴力を与え、己を恥じさせ憎ませ、人間を恐れさせた。サイルは抗うことはおろか、逃げるという選択すら知らなかった。殴られるたび反射的にこぼれる謝罪以外は言葉を発する機会なく、血と膿みと砂で汚れて、集落のラクダ小屋でいつも腹をすかせていた。出処も吐き出し口も分からない悲しみに身もだえし、夜は何度と無く目覚めては苦痛の予感に泣き、朝は始まりに怯え泣き、昼は能面のように心を押し込め、宵は住処にこもって廃人のように倒れた。折檻が恐ろしく嗚咽の自由さえもない。心はとうの昔に破れ、頭蓋はいまにも内からはじれそうだった。わけもわからないまま毎夜、終わりを待った。だが、並外れた体力は、彼に明日を与え続けた。

月日を隔ててなおそれらの記憶は、サイルに拳を握らせた。

気づけば、眠っているウィラーダが、苦しげに唸った。感応力でサイルの内心を感じ、嫌な夢でもみているのだろうか。

ミーサークも、出会った夜、サイルを感じてやってきた。その日、竜が周辺の砂漠を飛んでいると、サイルは人々の会話から漏れ聞いている。

ラクダ小屋の外で、潜めたはばたきの音がした。月光に照らされる小屋の床の上に、子供の身長ぐらいの、砂埃をまとう、変わった

影が伸びた。

「こんばんわ」

影は、落ち着き無く身じろぎした。

「本当は、ここに来ちゃいけないって、放っておきなさいって、母さん父さんは言ったの。人間たちには、関わるなって。一生懸命心を隠して、二人が眠ってる隙に出てきたのよ。あんまりあなたが、悲しんでいるから。かわいそうで。私、あなたの味方になりたいのねえ、そっちに行っていていい？ 私のこといじめない？」

サイルは驚いたが、誰かの要求を拒んだ経験がなかったので、頷いた。

ミーサークはラクダたちを気にしながら、足音を殺して近寄ってきた。その体から発せられる温かみに、サイルは知らず涙を流していた。警戒しているが、初めての敵意の無い虹色の瞳を見て、立ち上がって、自分からミーサークに触れた。

ミーサークと、なし崩し的に関わった彼女の両親から、サイルは多くを教えられた。生きていくうえに必要な喜びの数々を。語らうに連れ、堂々巡りを止め、広がり続ける自分の思考に驚いた。

ミーサークとサイルは、互いに始めての友だった。転げまわって遊び、寄り添って眠り、ミーサークは未熟な翼にサイルを乗せて、あちこち飛び回った。ミーサークの背に乗って夜空を飛びながら、サイルは歓喜に泣き、吼えた。このまま遠くへ、ミーサークと共に飛んでいきたい。

己の一族竜が舌を嫌悪しながらも、今でもサイルが竜王を恨む気になれないのは、竜への恩と情があったからだった。

「父は」

リカーが、すすり上げたので、サイルはやっと彼女が泣いていることに気がついた。

「父は昔から、差別や、悲劇から、私を遠ざけようとするのです。それも、父の優しさなのです。でも、私はそれを鵜呑みにして知らなかった、知ろうとしなかった」

リカーの手の甲に涙が落ち、澄んで、薄闇に光っている。

「この集落の方々、とても、怖い顔をしています。見たことがない表情で。悪意に満ちて、でも、欲望に、赤らんでいました。お皿を返しに行った時に聞いてしまいました、あの方たちの恐ろしい言葉。私たちへの恐ろしい感情。そして恐ろしい衝動。きつとあの方々も、竜が舌の一族の罪に慄いて苦しみ、そうならざるを得ないのでしょ。う。ですが、何の罪も無い小さなサイルさんが、あんな敵意に囲まれて、さぞ苦しんだらうと思うのです。だから、今も苦しんでいるでしょう。誰にも、事情を明かせずに」

自分への同情に驚くサイルへ、リカーはなおも泣きながら、  
「罪の証ではないのです」

静かに、決然とそう言った。サイルはリカーの意図が理解できず、うつむいた彼女の頭を見下ろした。滑らかな光の走る、黒い波。初めて向かい合った時、竜の首ようだと思った。リカーが涙を拭って顔をあげたので、まともに見つめ合うことになった。

小娘とはいえ、泣いている女の顔をまじまじと見たのは、初めてだった。サイルが反対にリカーを哀れに思うほど、彼女の表情は悲しみに満ちていた。だが、リカーはいつもの下がり眉の根を寄せて、悲哀を振り払うように首を振った。

リカーの細い腕が広がって、自分の肩を抱き寄せようとするのを、サイルは驚きをもって見守った。彼女の手はサイルの背中を包んだ。それはしがみついているようでもあった。彼女の手のひらは、熱い。「どうであれ、サイルさんの力と髪は、竜と一族との、親交の証なのです。そもそも一族の罪は、竜に愛されようと為したことです。その悲願を、サイルさんは果たしたのです。今、その末裔であるあなたが、地上で最も竜に親しいのは偶然ではありません。誇ってください、あなたの運命を。罪は、竜の脅威が、積年の差別が、既に一族につぐなわれました。今のあなたにあるのは証と愛だけ。どうか、もう負い目から自由になってください」

親交など、竜と一族にあったはずはない。一族は竜にへつらい、

竜は人間を利用したにすぎない。

だが、竜が知能を持っていたかつてですらまれたった、異種族間の友情と、信頼とが、確かにサイルとミーサークの間にはある。それを運命だと、リカーは言う。

「竜が舌に生まれた運命が、ミーサークという喜びをもたらし、ウイラーダという希望を与えたのです、他でもない、あなたに。過去は、人生をうずめかねない苦痛でしたが、それは苦痛を糧に芽生える愛のためにあつたのです。愛を得、愛を与えるために」

「愛だつて？」

その響きはサイルを不意打ちにし、鸚鵡返しのサイルの声は、真っ正直に驚きを表してしまった。

「俺が愛を得るだつて？ 与えるだつて？」

リカーは真剣そのものだった。サイルも、からかうことも冷笑することもできなかった。

—— 罪が償われたとしたら

集落の過去と、一族の罪悪感が愛の種だったとしたら。

捨てることも忘れることもできなかったこの人生が。愛へと導かれたものだったとしたら。

そうならば。

己の生まれたことを憎まずともいいというのだろうか。

竜を愛していいというのだろうか。恩人としてではなく、友として。

そして、この人生に愛が、未来があると思つていいのだろうか。

「私が一番最初の人間です」

リカーは熱っぽくささやく。

「竜が舌のあなたを愛する、人間です。あなたもどうぞ私たちを愛してください」

隣に立つ人間をも、愛してもいいのというのだろうか。

サイルの喉から腹に熱い塊が落ちた。

息がつまり、言葉もない。

全身がしびれて動けない。細身の娘が精一杯抱きしめただけの抱擁で、身体が壊れそうだ。

ずいぶん時間がたってから、ためらいつつも、サイルはリカーの肩を抱き返した。

小さく呟いた。

「……気を使わせたな」

リカーが身体を離し、サイルと向かい合い、涙を浮かべた瞳で微笑む。

この自分を愛する。随分簡単に、出会ったばかりの男に告白するものだ。馬鹿にしてやろうと思うのだが、うまく言葉が出てこない。ウィラーダが寝言の代わりに幸福げに鳴く。リカーが優しくくちばしを撫でてやった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3528x/>

---

砂渦の中、竜の市

2011年12月16日19時45分発行